世界論

特117
83

始

特117
83

寄進(但し草稿中の清書)

文化八年十月廿七日

南雲庄兵助

上野圖書館

御中

特117
83

帝國圖書館藏

世界論

南雲庄二郎草稿

著者寄贈本

大正
8. 11. 3
寄贈

第一章　世界論

世界は世の中の一切何もかも全部ひっくるめて総て之を包括する無数の事物を限る大の空間無始無終の時間世界の存在にはなり三種の学説がある無の論存在の論と

無の論にいく世界はそもそも一物も有はなし総て無なり有りと思ふは迷なりと

有無不明論にいく世界の有無は不明なり実と有りとするも実と無しとするも我心なり然れども世界は心の外なり事実にうつされは知るへからす然るに事実の見聞は我心を欺くことなりと

有の論は更に三種の学説に分る唯一論因果論偶然論である

唯一論は一部有論である其有りとする所のものは異なるに従へ

説かれる唯物論に曰く物あり心なしと唯心論に曰くこの外は
しと実体論に曰く実体あり性質は其従属のみと性質論に曰く実体
は空想のみ見るべからず聞くべからず觸るべからず見るべきは皆
色なり聞くべきは音響なり觸るべきは堅軟なりと
同一論は此等の唯一論と折衷調和せるものなり曰く物と心とは
同一物の表裏面なりと曰く実体と性質とは区分せられ
るも差別に過ぎざるものなりと
保存論は全部有なり物心同一なりと
云ふも全然同一なるに非ず物あり心あり世界は全部有なり物心同一なりと云ふも自己と主張する
のみにて他を否定するのみなるに世界は有か無かの二
つに一つなるべき明なる第三の状態あるべからず又夢にせよ迷にせ
よ眼には花が咲き秋には虫が出る之を無なりと云ふべし其れは無と

称するまでのことなりと
世界の真偽には第三種の性質がある虚偽論真相似相論真正論て
ある。
虚偽論に曰く世界は虚偽なり真なるものは唯一定不変の物しかけ
れは仏説の大乗理想なり、火は熱しるかと見れは信じ水は冷
なりと思へは幻術となり是幸と不幸となりて信家する
真相似相論に曰く世界には一定不変の真相はあるも其が稍々の仮
相に変現する真相は喩へは土器の如く人形の如くてあるとも
真相は変現の如くに人形のかくてあるとの仮相は喩へは土瓶の如
真相可知論真相不可知論てある。
真相可知論に曰く世界の真相は我々の知り得べきものなりと共
論は更に四種の性質に分れる有なりとの論無なりとの論有にして

無なりとの論有に非ず無に非ずとの論となる。
有なりとの論は其有なるもの、異なるに従ひ大別六種の性質に分れる。五化説事相説無記説物体説事実説物質説となる。
五化説には曰く真相は五化其自身なり又曰く因果なり曰く道理なり曰く神なりと。
事相説は曰く在立なり曰く思想なり曰く心なり曰く名称なり曰く言葉なり曰く数なり曰く真如なりと。
無記説には曰く震動なり曰く作用なりと。
物体説には曰く分子なり曰く原子なり曰く五に一一と形のべし曰く線に一一と網のべし曰く面に一一と木の葉のべし曰く体に一一と岩石のべしと。

事実説には曰く光なり曰く音響なり曰く電気なりと。
物質説には曰く水なり曰く火なり曰く土なり曰く風なり曰く火と水となり曰く四大元素なり曰く化学上の諸元素なりと。
無なりとの論には曰く世界の真相は無なり真相無さに都て無なりとか即ち真相なりと。一切皆空と云ふ事の是なり。
有にして無なりとの論には曰く世界の真相は有てもなると同時に又無てもなるものなりと。色即ち是れ空なり空即ち是れ色なりと云ふ事の是れなり。
有に非ず無に非ずとの論には曰く世界の真相は有にもあらず無にもあらず又有にして無なるにもあらずと。空假中即ち空と仮と中間の中なりと云ふ事の是なり。
真相知所知論には曰く世界の真相は知る人のみなるべし仮相知る仮

相其他主と云へば又有んーと云ふことこれ又有んーと云ふかれも彼の智識の及ぶ所は復た真相より脱し去る所の仮相たる其未だ義理せざる所の真相其自身は世界の毎に隠れて居る仮相たる感知に待つ外なきと所たると無言無示無識とを いりの是なり。

真の涅槃に行く世界は此仮真たる此の仮に外に真相はなく彼の知るべからざる真相なりとは自義障蔽する此世界は彼の見る通り彼の聞く通りたる水は水なり火は火なり火と燈なるは火の燈なるなり火の燈なるは火の燈なるなり水の氷となるは水の氷となるなり水の基主となるは水の基主となるなりと

世界の内容は千差万別の雑居混淆たる之にはと三種の学説かある仏教の一切種智基督教の全智全能儒教の博愛多文である

仏教の一切種智と云ふのは世界の内容全部を残らず知り盡して居ることである之を解脱みは如来の知見とも云つて完全無欠の仏如来と云ければ出来ないとなつて居る若し彼を悪しか仏如来となるには自力と他力とならねばならぬのである先づ大乗小乗の二段に分れる小乗とは世界の差別は総て仮相で真相は一切平等で差別しないと悟られねばならぬ大乗とは平等を差別の真相より推し分れ差かの咲いて続を玉眼の差別かと云ふ説と云ふので此諸説を一々明細に知り盡すか一切種智である仏も之は約四一代には設き盡せぬから彼を悪しは無量劫の間十方諸国に往生し三数の諸仏に親近し諸行苦行の上で之に達しなければならぬと云ふ故に彼を一切悪生をしん総て此一切種智を得るのは仏教結局の最大目的である一切の諸仏は厳也も

発生と教導するの責任がある。之は又大乗中の真の大乗としかして大乗は更に権大乗と實大乗との二段に分るし所にてある。斯のごく仏教の一切種智なるものは之を待ちたる無量劫の間の難行苦行を要する。

基督教の全智全能は仏教の一切種智である。但し基督教の全智全能は天にます神一人限りとする。其神は人間并に天地万物を創造したる。此等の創造されたるものは皆完全なりとさるるのである。教祖の耶蘇も全智全能とはなる。之は創世記のことである。所が其不完全なる人間は勉と罪とを犯して之が為の神罰を蒙むる様になった。之は懺悔のことである。其所で彼は懺悔を為し神の大なるかにより再び天国へ救い上げて貰はねばならぬ。神の子耶蘇は之が為め神の使者となって人間に降って来たのである。之は新約紀のことである。斯のごく基督教の全智全能なるものは彼を人間の到底達することの出来ぬ不可能事として満足せざるを得ない。

仏教の博学者又は仏教の一切種智基督教の全智全能である。仏教の博学者又は聖人の上のことである。但し彼の聖人となるのは決して困難のことではなく聖人と師として之を学んだ出来ることである。聖人とは身は仁人君子なる。広く天下を治め徳沢を後世に垂れたりとする仁人君子なるの仁徳を備へるには心を正し身を修め治める。広く天下を治めるの智徳を備へるには物事の是非を明かにすることが出て本末の治めてある徳沢を後世に垂する事徳を備へるには性に安んじ独を慎み道を離れざることが出て絶対の治めてある。而れるは之と一言の内に約して仁と云ふ。曰く由や如何とにて多く学て所を立と知るものと為す。孔子曰く然り非か曰く非なり予れ

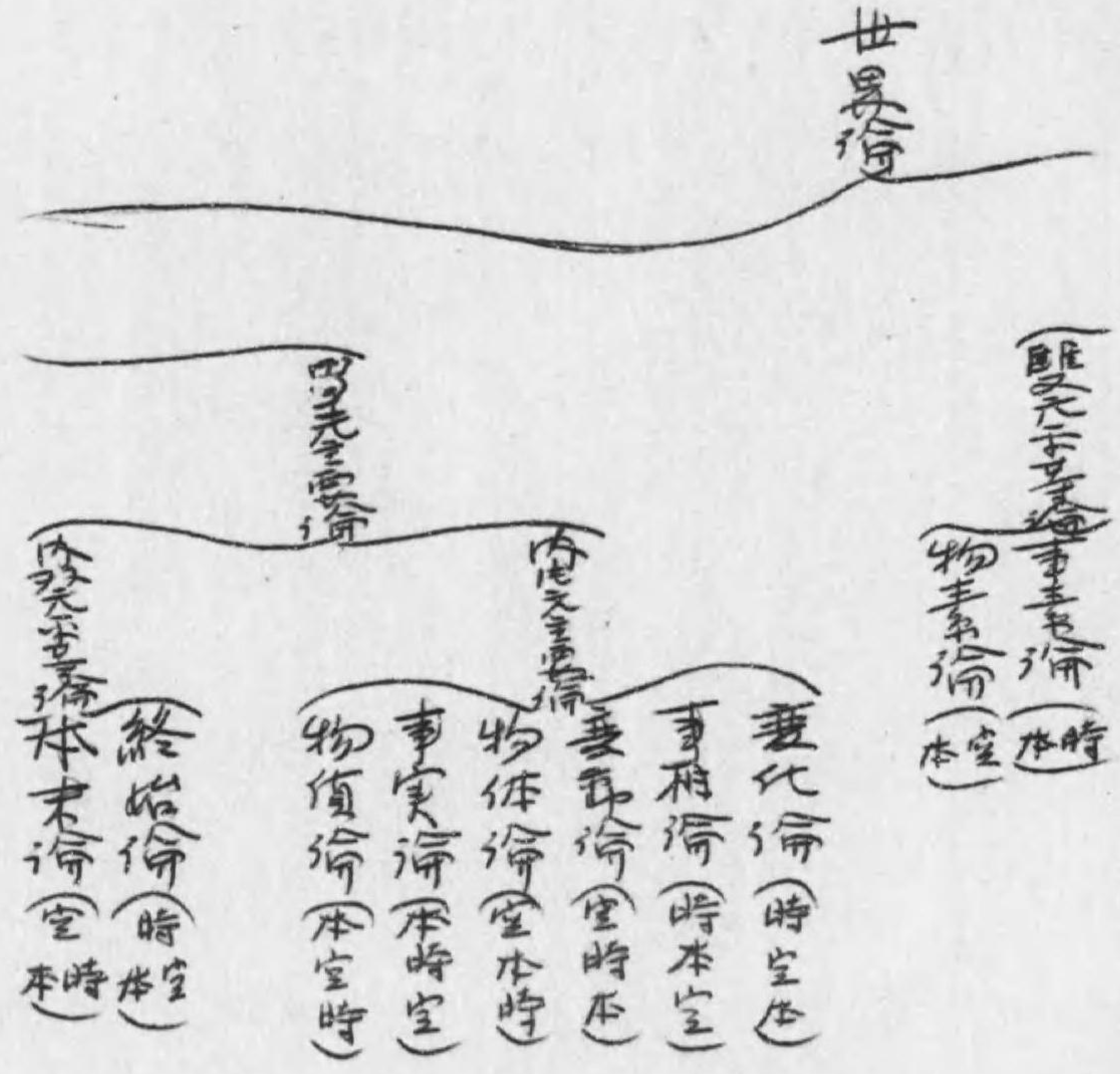
一は之を貫くと一は之を貫くとは世界内容の千差萬別の雜然
混淆を同じくするものは同一なるものに類集し異なるものは異なるものに種
別する又の云ふとする即ち類集種別とする斯のごとくして紛糾の多
量部の同類行若行せ收は得られんのと云ふ所の一切種智と耶蘇は
神のみに之いと配意した所の全部全能も孔子の所謂類集種別の一
貫法によりて容易に之を得ることが出来るのである
類集種別の上に斯の云ふことに到達した世界は時間空間事物の
三大元素の結合である扨三大元素と今仮に時元空元物元と名名さ
る所の三大元素を數學の順列法及び混合法によりて其總ての
結合方法を算出するとさは其れは取りも直さず世界内容の總ての
種類を網羅するものとなるのである此の通りである

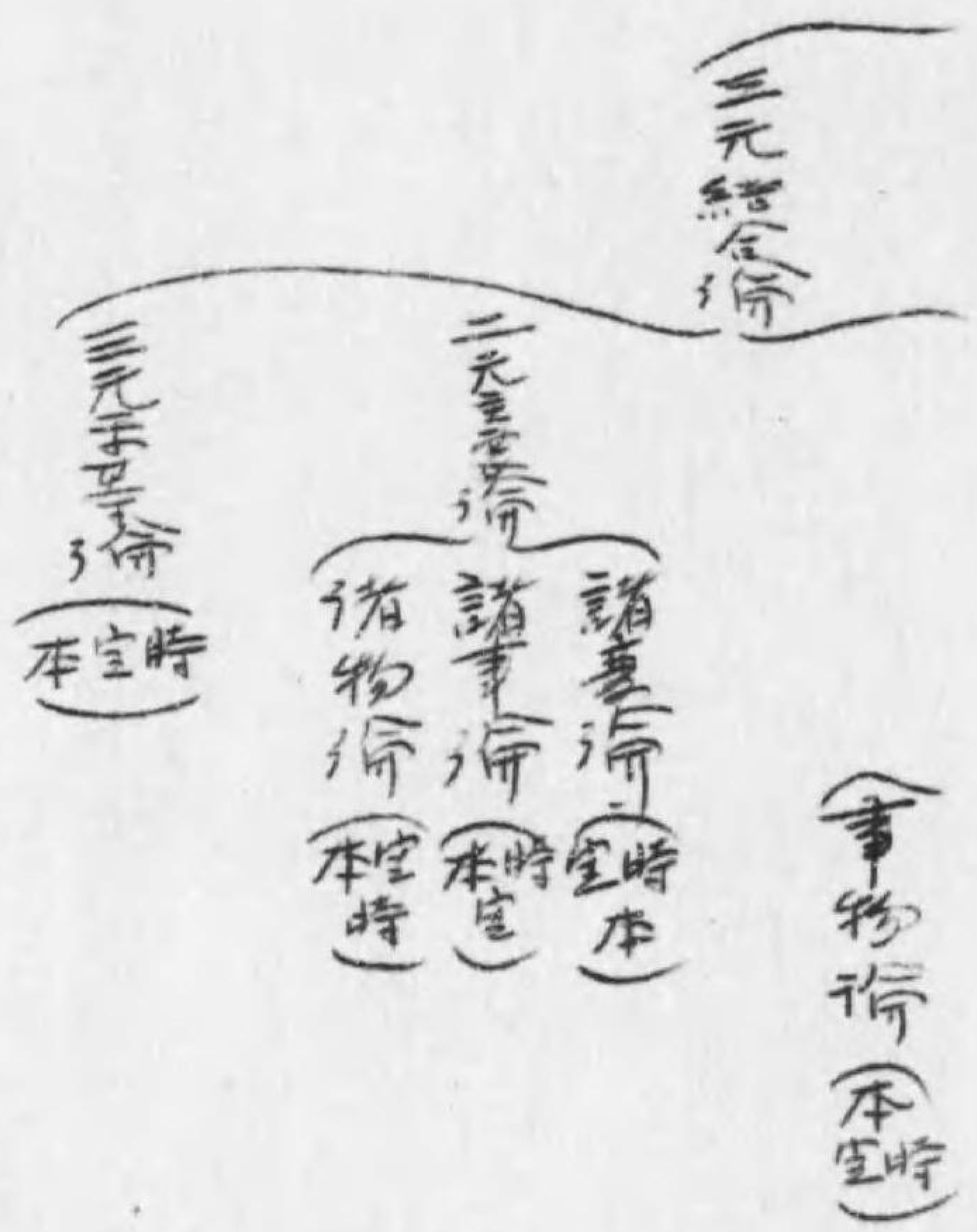
時元論（時）
空元論（空）
物元論（物）
各元論

三元經營論

化元素論（化素論（時空）
相素論（時物）
動素論（空時）
体素論（空物）
実素論（物時）
質素論（物空）

妻素論（時空）


世界論
変化論
時空本
事柄論
時本空
物体論
空本時
事実論
本時空
物質論
本空時
終始論
時本空
本末論
空時本
物素論
本空
本時


三元結合論
本空時
諸物論
本空時
事物論
本空時

第二章　各元論

各元とは世界を組立てる最初の材料であり又世界を分解して行くた最後の材料である

各元の数は三つである時元空元物元である時元も空元も此上分解の出来るものでなく物元は尚も時元空元に非ざる限り總て悉く之を包括したものである斯くて三元である一つの問題は数量である此等の三元より更に数量を分解し得るではないかと云ふのである

尚一つの問題は結局である世界は此等の三元の結合であるから結合なるものは三元以外にあるではないかと云ふのである

三元は皆別異である別異と云ふのは時元空元物元は互に相違せぬことである意味とは時元は空元になつたり空元は物元になつたりする様のことである其では本来別異のものでなく同一のもの

である。三元でなく、一元である。

第三章　時元論

時元は普通の時間である長さのものである。

時元全部の長さは無始無終である。前にも後にも其端緒を云わぬのはなく、我々は如何に長い時間を想像しても全時間は其無限信である。

時元の一部分は時間である時間を細分すれば箇々の短かいものとなる。短かいものを更に細分すれば更に短かくなる。斯の如く細分を繰り返すには繰り返す程短かくなる。短かくはなるが幾度繰り返しても無くはならぬ。故に無限に細分を繰り返すことが出来る。

其無限に細分して最早細分することの出来ぬ極度は時期である。長さのないものである。但し此時期を無限に合すれば又さる時間となる。

個々別々の時期は總て同樣のものである。

時期と時期との間に前後の關係と遠近の關係とがある。

前後の關係とこゝのは今ある一つの時期より之かとすれば他の時期は必ず其前か後かの何れかなければならぬ而して此等の時期は前より後に進行するものである。現に進行し、時期を現在とし、其既に進行したるものを過去とし、其未だ進行せざるものを未來とこゝのことである。

遠近の關係とこゝのは今又一つの時期を第一の時期とすれば其れより前に隔つて第二第三第四と一時期宛順次に連續して新しい時より既を古い時となり又其反對に後に隔つて行つても之と同樣に近い時より既を遠い時となるのである。

第四章　空元論

空元は普通の空間である大さのあるものである。唯普通の空間は不生不滅不移不動なりとこゝはれて居る。併し純粹の空元には生滅もなく不生不滅もなく移動もなく不移不動もなく、此等は時元に結合したものとしてある。

空元全部の大さは無限大である。周圍四方八面何れに行つても際限のない我々には如何に大なる空間を想像するも全空間は其無限倍である。

空間は空元の一部分である。之を細分すれば又個々別々の小なるものとなつて時間と同樣に無限に細分することが出來る。

点は空間を無限に細分する。極度で此上最早細分することの出來ないまで大きさもなく幅もなく長さもないが之を無限に合すれば

又しの空間となりたるものである。

一説に曰く言限に細分せらるるのは零である無しかるか零無し無限に合すれば有となりと然らば零無にも種類を別たねばならぬ其一は合して有となる所の零と其二は合するも矢張り零に過ぎざる所の零としてある点丈の其合して有となる所の零も合して時間になる所の零と合して空間になる所の零とを区別せねばならぬ。

面を別る線の点は線と同様の一種である。

点と点との間に方面の関係と遠近の関係とがある。

方面の関係は今ある一つの点より三わとりは他の点は其周囲四方八面無限の方面に在る。

遠近の関係は今又一つの点を第一の点とすれば其周囲に直接に密着する所の一皮丈の線を第二の点である之は最も小なる球面である又其球面の周囲に更に直接に密着する所の一皮は線を第三の点である斯のごとく第四第五と近さより段を遠く少さより段を多く其上に其上にと無限の層を為して居るのである。

第五章　本元論

本元は普通の事物である。本も普通の事物は多少に拘はらず時元空元が結合して成るけれども其れは本元本来の性質であるから等閑視することはかして有益したりとて時元空元より引き離して本元は存つしこと殺して有益したりとて

保し順序としては先ず純粋の本元より論じなければならぬ。今世界より時元を悉く取り去るときは跡には空元と本元とのみが残る。次に之より空元を悉く取り去るときは跡には純粋の本元のみが残る。其純粋なるものなるかは之を熟考すべきである。斯の如きものは所在もなく方所立もなく性質もなく形体もなく大小もなく色もなく響もなく見るべく聞くべく嗅ぐべきものである。

今空元の結合とる本元即ち物質を細分さる少量の物質を微塵に碎き其微塵の一粒を更に微塵に碎く斯の如く細分を繰り返して行くときは終には大いさのない所の点に至らねばならぬ此の点を以て不可分の単位し為し之より空元を引き去りたるものを仮に余名して元子と称する

一説には不可分の単位に一定の大いさがあると云はれて居るけれども大いさのある以上は其れには左右外等の部分があり之を更に細分する方法がないにもせよ我々の思想とは別へ細別することも出来ることは勿論である

元子の種類に関する五種の学説がある不一同説無限種説多種論二種論一種論である

不一同説に曰く別箇の元子は総て悉く違ふ所があって一として互に同様なるものはないと

無限種説に曰く元子中互に同様なるものがある故に種類の分れるけれども其種類の数は無限ではなく一定の限りがあると而して其種類の数は異なるに従い特多の学説にも分れるのである

多種論に曰く種類の数は無限ではなく一定の限りがあると而して其種類の数の異なるに従い特多の学説にも分れるのである

以上の三種の学説にては元子の種類は幾段にも大別細別することは出来るが以下二種の学説にては大別細分の段はないのである

二種論に曰く元子の種類は二種に限られて居ると例之ば陰と陽とのごとき二の類である但し其二種の如何によって幾個の論に分れる

一種論に曰く元子は総て悉く互に同様で少しも異なる所はなく純然たる一種であると雖も事実に物質の種類は頗る多いけれども互に

相変遷して休来同一様であることの明白となって居るものが少く
なく、若し總ての物質が悉く相変遷するとすれば、これが利用は其れが
直ちに一種論の立證になるのであるが、今日未だ其所までは進まず
居らぬのである。依て今一足飛に一種論を仮定し之に時元空元と
結合せしめ其結合の仕方によって諸種の物質の成立を説明することが
出来れば是れ亦一種論を立證するものと云はねばならぬ。

元子に自他即ち我非我の関係がある。

一の元子より云へば其元子は自己即ち我である普通に自己
と云へば我身体を指すのであるが然れども手を切り足を切って
我は二つにもならず但減もせず矢張りもとの一つである又我心
を指して我なりと云ふこともある。依て昨日の心と今日の心と全く
違って来た場合にも我は敢て別にもならず終始一貫すと、同一で

ある故に我は我身我心以上に在る唯一不可分のものでなければな
らぬ。中庸に曰く喜怒哀楽の未だ発せざる之を中と謂ふと其中なる
ものは即ち我である。大学に曰く意誠にして而して后に心正しと其
意なるものは即ち我である。テカルトに曰く我思ふ故に我在りと其我
なるものは即ち我である。

此我なるものは我自ら我を知るのである。之を自覚と云ふ。各自自身に
當然之を自覚し如何に知り度くなくとも何うしても知らざるを得
ざるのである。故に又知り易い知り難いの問題ではなく已れとなと
へ忘れんとするも忘れ能はざる何所へ行っても何時になっても自
分を見失ったり他人と取り違ひたりすることの憂は全くないのである。

自己以外の元子は總て他人即ち非我である。此非我を知るのは他

覺してある之は知り度くなければ知らぬことも出来る何らかして他覺するかと云ふと是れは他に何等の理由もなく単に之感知するうてある即ち直覺するのである

第六章　二元結合論

二元の結合は世界開発の論てある世界は其材料と各元の存在のみては出来上らぬ其材料が互に結合せねばならぬことある

此結合は他の力を藉らず各元自身に於て結合するうてある各元はもとより独立して存在するものてなく其性質として結合せすに居らぬものてある

又各元は互に結合すると其本来の性を棄けて別物となる様のことはないうてある即ち変現する様のことはない故に時元は厳と時元其侭てある空元て布元も厳まて空元其侭布元其侭てある

又此等の結合は各元が互に並び合つたり重なり合つたりする所の混合や化合のやうなものてはなく各元互に全く一つものに融合するのてある混合化合の場合には物と二つ丈の分量

となり三つ又合すれば三つ又の分量となるも各元の結合の融合の場合は二元相合するも二倍の分量とならずして三元相合するも三倍の分量とならずして全く一つのものとなりて仕舞ふのである

第七章　化元主要論

化元主要論は各元が他の一元に結合したのである各元の性能発揮の第一歩である二元の論に非ずして各元の論である六つの場合がある

化素は変化となるべき元素である其例は速力である即ち速い速いである

相素は事相となるべき元素である其例は断続である絵画である

動素は変動となるべき元素である其例は動静である方向である道路である前後左右上下の類である

体素は物体となるべき元素である其例は形状である点線角面後錐体等である

質素は事質となるべき元素である存在を為す所の事である
質素は物質となるべき元素である所在のある所の物である

第八章　化素論

化素は空元の結合したる時元である時元はもと所在もなく不所在もないが空元に結合したる時元は所在が生ずるのである

時元の各時期は空元の總ての点に結合する此点に結合するも彼の点に結合するとの差別はない之れは時期の偏偏性である依し之が為め一箇の時期は数多に分裂したり膨大したりする譯ではなく矢張りもとの一箇である故に西洋の今日も日本の今日も支那の今日も皆同一の今日である

化素の例は速力である速力とは一箇の物が一つの場所より他の場所へ移り行く間の時間である其うゆうこと物にけを引きまっておとの速さ丈を抽象的に考えたのである

異論者は曰く速力は時間でもなく空間でもなく一種の無形物で

あると或は曰く物質と係り有する所の勢力であると又曰く物質に附隨する所の性質である故に物質のない所には速力のみ空に存することはないものであると

係りながら速力は時間である時間は速力の要素である時間ある故に速力かある時間かなければ速力はない速力は唯空間に結合したる時間である物質はなくとも速力はある其速力の上に物質かあれば速力か到り易いとゆふ丈来て結合するのである故に物質かなれば速力か到り易いとゆふ丈のことである

今仮元の一元を仮定する其つか第一の時期に一点に居る第二の時期にはもとの点に居るか又は他の点に移るかの二つに一つの場合かある居るのは速いのである移るのは速いのである第三の時期にも亦同様に二つに一つの場合かある前の時期と直して四つの場合となる第四の時期にも亦二つに一つて八つの場合となり第五第六も亦同様て一時期毎に遲速の配列法は二倍になつて行くのである之は速力の等速不等速加速減速等無限の種類を生ずる所以である

此等は同一物か一方より他方に移る所の速力であるか普通には同一物の進行でなく一種の状態例之は水の波音響光線の傳播の如きものも速力と云はれて居る此等は長い棒の一端を押したり引いたりすれは他の一端も同時に動く様な緩て斯様な性質を施すときは如何なる遠き距離でも如何に早くも乃至同時にも傳達の出来るのである故に此両者は之を正確に区別して置かねはならぬ

第九章　相素論

相素と休元の結合したる時元である時元は休来千篇一律と何の波瀾も抑揚頓挫もないのであるが休元に結合して始めて音樂の種々の調子を生ずる

時元の各時期は又休元の總ての元子に結合する甲者の云ふ今日と乙者の云ふ今日とは別異の時期でなく同一の時期である

相素の例は音樂の調子である

此例子も亦一種の無形物で時間でもなければ空間でもないと云ふ異論のある曰く音樂の調子は我々の耳を以て聞くことが出來る時間は我々の心にのみ直覺するもので我々の五官に感知することは出來ないし

係りなかろう我々の五官はよく此時間を感知するものである我々の

音樂を聞くのは我々の耳がよく時間を聞くのである我々の認識するのは我々の口がよく時間を讀むのである

今空元の一点を仮定する第一の時期は元るが結合するかどうか

の二つに一つである第二の時期は第三の時期は皆同様である

音樂の調子は斯の如き時期の連續せるものにして又元るの結合せる時期の斷續である故に一定の時期の間に存り得べき調子の數は二と其一定數丈自乗されば出来るのである此等は種々に大別細別も出来る其斷続の粗大なるものは電信の符合の如く一を聞き分くることも出来るが其微細なるものに至っては斷續が一を刺らなく厚に一つの續いた音に聞ゆるのである

我々の思想も一種の調子である即ち心の本相である幾多の音樂幾多の文章が心の内に合奏さるゝのである其調子其順序の如何は

[illegible]かも我々貫不肯の仍て分かるゝ所の要件である

第十章　動素説

動素は時元の結合せる空元である空元はかと存在もなく不存在もなく生滅もなく不生不滅もない又移動もなく不移不動もない其れか時元に結合して始めて存在が生ずる

空元の各点は時元の總ての時期に結合する之を空元の常住不生不滅と云ふのである

又時元に結合する所の空元は動静である又移動である空元が移動するのではなくして移動其自身は空元なのである

此動静に関しても異論がある曰く動静は空元時元以外の無形物であると雖しながら空間は動静の最大要素である空間かなければ動静はないのである加之我々は動静をば無形物に非ざるのみならず空元有形物なりと云ひ度いのであると云ふのは我々は此動静

なるものを目で見て居て其大小長短方向等を測ることが出来るかうてある

又物が無ければ動静は無いてはないかと云ふ論もあるけれども其れは唯鳥渡到り懸いと云ふ丈のことてある空元と動静なりと云ふことが出来るか物と動静なりと云ふことが出来ぬ動静は唯物の第つて結合すべき下地て抽象的になりて居るて物が無くて動静はあるのてある

今到り易くする為め一の元るを仮定する其れが今先づ第一の点に居る其後其点に止まつて居る間は静てある

次に他の点へ移り出せば其れは動てある此の他の点なるものは新に第二の点の内てなければならぬ第三第四の点へ直接に飛出す譯には行かぬ尚又其れは第二の点の内の何れか一点てなければならぬ

元るは二方三方へ散開することは出来ぬ斯くて第一の点と移り来た新の点との関係は方向と云ふのてある

其元るは更に又方向を取る斯の如く方向が集まつて道路が生ずるとの静止は点てある動の方向道路は線てある線の道路が集まつて公園の如き面となる面の公園が集まつて体積となり水中は莫の道路空中は鳥の道路てある体積が集まつて重複する場合もある同一の棚て幾度も物を量り取る様なものてある

第十一章　體素論

体素は本元に結合したる空元である空元は本来混沌混沌として何等の形紋もないものであるが本元に結合して始めて形成がせらる

本元の元子の結合せる一点は点である其接着せる二点は最も短き線である其三点は最も狭き面である其四点は最も小なる体である此等は種々に配列して無限の形成を生ずる

我々の心も一種の形成である即ち心の本体である然るに反論は之を打消すのである曰く心は無形物にして有形物に非ずと係しなから心と雖も其所在がなければならぬ我々の心は我々の身体の内に在るか外に在るか又身体の何れの畳に在るか既に所在があれば其在る所と無い所との境界がなければならぬ境界があれば何等

が其形状かなければならぬ筈である。

本来心なるものは矢張り三元の結合に外ならぬもので之を時元より見れば心の体相で無形である之を本元より見れば心の本質で又無形と云はねばならぬ唯空元の方より見れば心の本体なるもので之が有形となるのである。

我々は都合眼目外界の感覚を遮断し単に心視中の現象のみを辿ると雖も其幾多の記憶想像が内眼を以て外界を視ると殆と差違なき所のものが我々の心眼に映し来るのである此等は何れも外界の物型にして我々心視の底室中に飾りかけられてある所の形状である。故に我々の心は無数の事物を陳列せる一の博物館にして茲に蒐集さるゝ物品の種類数量並に其陳列の整頓不整頓は是れ共た驚て我々の智恵の伝て分るゝ所の要件である。

第十二章　實素論

實素は時元に結合せる本元である本元はすでに存在もなく不存在もなく生滅もなく不生不滅もない其れが時元に結合して始めて生命が生ずる譬に曰く時間は黄金なりと我々は今其以上を云はれはならぬ時間は我々の生命である。

我々の生命に付て五種の学説がある不存不生不滅論有滅不生論生滅論有生不滅論常住不生不滅論である。

不存不生不滅論に曰く我々は時間上に存在のないものである生命なるものはない一時間も誰も存在せぬこと少なければ存在するに至ることもない即ち生ずることも無ければ従て滅することもないのである。

有滅不生論に曰く我々は有る有るが終には滅して無となる而して

て無となりたる以上再び生ずることはない有は無となり得べきも無より有の来り得べきものではない と此説によれば今日の我々は無始の昔より存在せるものでなければならぬ 偖し一旦滅すれば新に生ずることの無いから世の中は物の減少するの一方終には無一物となり了らねばならぬ

生滅論に曰く我々は始めは無くして新に生じたる有である 偖し生者必滅であるから再び滅して又もとの無とならなければならぬと 此説によれば有は無しなり無は有しなることが出来る故に我々は幾度となく有無生滅を繰り返して居ることとなる 故に此説に於て我々が生じてより滅する迄の時間即ち生命の長さに付いて四種の学説がある 瞬間説 年齢説 生涯説 時代説 である

瞬間説に曰く我々の生命は一瞬間である其瞬間の外前際我なく後際我なし 我ありと雖も同一の我に非ずと

年齢説に曰く同一なる我々の生命は我々の精神身体の同様なる年齢の間 ある迄 但し此説では同一なる我と別異なる我との境界が判然せぬ

生涯説に曰く我々の生命は出産より死亡までの間 である と此説によれば生滅と不滅とが全く同意義のものとなるのである

時代説に曰く我々の生命は祖先より子孫まで一貫して歴る其間は人が代つても同一の生命即ち同一の我がある 祖先は我々の過去である子孫は我々の未来である と

有生不滅論に曰く我々は無より生じたる有である 偖し一旦生じたる以上永久に不滅である と此説によれば世の中の始めは何も無かつたかも知れぬが時を経ると共に段々物が生じて今日の如くな

へた所一切此後も続く物が生ずるてあらうから斯くては世の中は物の増える一方で終には折角生じたものも其居所も置き所もなくて困ることになられはなられぬ

常住不生不滅論に曰く我々は無始の昔より無終の未来に至るまで絶えず間断なき存在を為すものである古の我は今の我と同一である今の我は此儘未来の我である即ち常住である不生不滅である

と唯疑ひは我々出生前の記憶のないことである右も其点は存滅不生論も生滅論も同様である所謂記憶は心である我は記憶の心其自身ではないから我と心と離るれば我に記憶は無くなる譬ても

けれども實は之は容易に離るいものではなく我々には無限の昔よりの記憶は有るといふのである其れは此記憶なるものは心の病気でもないから其儘に停滞せず漸次に消化されて行くのである我々の食物が消化されて液となり血となり肉となり骨となり脳となると同様に記憶も消化されて概念となり道理となり本性となり段々我に近い所のものに斯の如く無限の過去より積り積つて作り上げられた本性なるものは我々が今日此通りの人間となへて産れ出てた所の胚種である今日の記憶も亦等しく消化されて第二の本性となり我々の未来に於ける運命を定むる所の胚種となるのである

第十三章　質素論

質素は空元に結合したる本元である本元はもと所在もなく不所在なるものであるが空元に結合して始めて其所在が生ずる之の本元の所在性である

此所在性なるものは本元の一元子は一時に於ては常に一点にのみ結合して他の点に結合することは出来ぬ同一物は同時に二ヶ所三ヶ所に在ることは出来ぬ二ヶ所三ヶ所に在るものは皆別物である若し同一の元子が分裂又は膨大して二ヶ所三ヶ所に在ることが出来ることは其れは尚二分し三分し得べきものであり常住の元子でなくなる故に一元子は一点のみに然合する之を其元子の其点に持する位置又は陳充性とも居住性とも云ふ

而して他の点に結合せぬことを其元子の此等の点に持する不在

性と云ふのである。

此等は本元の元子の空元に對する自性である。

尚又二箇以上の元子は同時に同一の点に結合することは出来ぬ。故に一の元子が其既に占領せる点へは他の如何なる元子も絶対に侵入することを許さない。此制限を礙滞性と云ふ。

其作り自己の占領せざる他の点には他の元子の占領を許す之を其元子の他の元子に對する能置性と云ふのである。

此等は本元の元子の空元に関して他の元子に對する所の能性である。

又一の元子は斯の如く他の元子に對して制限を加ふると同様に他の總ての元子よりして制限を加へられて居る之は無尽な制限である之は又本元の元子の空元に関して他の元子より受くる所の変性である。

故に本元の元子は其自性と他よりの変性との係合によりて其位置が定まる之を合性と云ふのである。

此自性死性変性合性なるものは他事にも同様に論ずべきことである。

此等は能然の制限又道理とも稱すべきものである。

斯の如くして本元の元子は總て空元の中に散布して其れを物質となして居る其散布の厚薄により物質は四種に大別されて居る。即ち固質流質気質空質である。

我々の心も本元の元より云ふときは心の本質である即ち我なる一元子の周囲に最も近く散在する所の無数の元子である。

第十四章　雙元主義論

雙元主義論は二元論の眞の結合である。三つの場合がある。

變素は諸變となるべきものと其例は慣性である。

事素は諸事となるべきものと其例は習慣性である。

物素は諸物となるべきものと其例は社會性である。

第十上章　變素説

變素は時元空元の結合である

其例は慣性である今弾丸を取って之を机上に置けば何時までも机上に止まって居る之を鉄砲に込めて打ち出すときは其弾丸は砲先の向いた方へ和れ出し空気の抵抗地球の引力等の障礙のない限り常に同一の速力を以て厭まても同一の方向に進行して止まない

之を二ウトンの慣性の法則と云ふのである

併しながら此慣性の何ものなるかに付いて今日の學説は未だ我々を満足せしめて居らぬ或は曰く物に固有する一種の性質である或は曰く勢力なる一種の無形物であると

我々は慣性とは時元空元の結合である変素の性情であると主張する時元の方から見れば同速で空元の方から見れば同方である此

同速同方は時元空元に固有する頑強なる性情にして如何なる事物に対すると厳まれて之を遂行して毫末と雖も假借する所はないのである。

反対論は云ふてあらう時間空間の性たる寛容放任未だ拒ぎ去者亟はすれ自らは何等の抵抗を更にないものであると之は大なる誤である。

我々は今自轉車にて急速に駆け出す横合より突然他の自轉車が飛出したとする危険たから俄かに止まることが出来ぬ之は時元の同速性が我々体元の言ふことを聴き入れないのである。然らばたがたりへ屈折しようとしても急に屈折することが出来ぬ是れ亦空元の同方性が我々体元の願に耳を籍さないのである。

第十六章　事素倫

事素は時元体元の結合である

我々が時元を感知するのは全く他覚である他覚ではあるが直覚である。総ての時期を直覚する始めなきの昔も終なきの未来も直覚する唯現在を去ることの遠近に従ひ新旧の感を異にするのである。

事素の例は習慣性である鐘の聲は餘韻嫋々として絶えざること縁の如くである我々が酒を飲めば酒を飲む癖が付き働くときは働く癖が付く悪いことをすれば悪い癖が付き善いことをすれば善い癖が付く。

此習慣性は時元から云へば同調性である一日二十四時朝に起き晝に働いて夜になれば眠る毎日同じ調子である一年三百六十五日春は耕し夏は耘り秋は刈り冬は藏す毎年同じ調子である一

生涯五十年乃至百年或は産れる生長する事を迎へる子女を養ひ先祖を送る自分も死ぬる先祖代々子孫代々同じ調子である

此間を調子を繰り返すのは要するに同一時間を折り返すのである昨年の春に花が咲いた今年の春も花が咲き明年の春も花が咲くのである昨年の花は今年の花を折返す所の原因と明年の花は今年の花を折り返す所の結果である

畢竟に曰く昨年の春と今年の春と其間一ヶ年の隔りがある短かい時間でもない其れ丈隔たつて居る花と花とが直接には何の関係にも在るべき譯はないのである昨年の花の春より夏になり秋になり冬となる頃次の時節を経て今年の春の花に来るまでは其れから其れと其間一瞬の間断もなく原因結果の連続関係が存在して居られはならぬものであると

様しなから今の一時期は次の一時期を折り返し今の一時間は次の一時間を折り返し今日は明日を折り返し今年は明年を折り返し今生は来生を折り返し今代は次の時代を折り返し今の億劫年は次の億劫年を折り返す折り返す上に於ては一時期たりとも億劫年たりとも全く同じ譯であるから其間に時間の長短を区別すべき何等の理由もないのである

故に習慣なるものは之を繰り返すことを屋なるときは其後に之が繰り返さることを癖となる傳てある例えば悪いことは誰一人好むものはないが誘惑の為め一度悪いことをすれば一度は二度となり二度は三度となり悪い癖をはけ度いと思ふのは出来無いから改め様と思ひながら是れ限り今日限りと云つてすると云ふ所ち明日よりの禁酒で斯うなれば是れ限り今日限りと云ふ

癖かはく其の是れ限り今日限りも人が聞き厭き自分が言ひ厭きる
様になれば後は平気で思いことをする癖がつく
斯の如く繰り返せば繰り返すほど其力は益々強盛となり其時間
の久遠なるものに至っては宇宙と共に悠久へからざるものゝ如く
なる故に体来習慣に過ぎざるものでありながら今日の学者見て
以て一定不変の道理なりと為すものも少くない例之は或る人生五
十年乃至百年之を生者必滅人力の以て如何ともすべからざる所の
道理であると信じて居る信じ之は習慣に過ぎざるものて人力とは
て左右し得べく容養等の方法で漸次に長寿又は短命の習慣を作っ
て行くことが出来るのである
之れは習慣性の多少屈伸し得べき範囲である其範囲は何れ丈の
ものであるかと云ふに甚れば漸次のものて決して急劇には行かな
いものである昔し仙人に会して不死の薬を求めしめた者があるけ
れども未だ百年の寿命を二百年にすら延ずることの出来ないて況
不死の習慣を作らしむるのは無理である之は習慣性の範囲外し
ある

第十七章　物素論

物素は空元本元の結合である

我々が空元を感知するのも他覚であるか又直覚である無限の果て迄も總て直覚するのである唯我なる元るの結合する所の点は中心の感である此中心を距ることの遠近に従い親疎の感を異にするのである

物素の例は社會性である空気は空気に集まり水は水に集まり土は土に石は石に集まり杉山には杉が集まり田には稲が集まり貨は貨に集まり馬に集まり馬は馬に集まり人間は人間に集まり小人は小人に集まり君子は君子に集まって居る

此社會性も空元の方から云へば同形性である形ちも同じく大さも同じである人間と云へば人間其組織構造から身長がうよくる斯く

は揺えも揺つたものとなる他の動物も其通りとなる高は高に在は
在に卑は卑に揺つて居る植物も其通りとなる花とその業実とも
梅は梅櫻は櫻皆一つ鋳型に嵌えた様となる無生物も其通りとなる
偖社会性なるものは空元出元の結合せる所の物なるものの情と
此社会性なるものは空元出元の結合せる所の物なるものの情と
ある事も道理の範囲内に於ける傾向性となる之自然の範囲内に於
ける好悪の情の発表となる情性も習慣性も同様となる情性は善な
るものの情となる習慣性は善なるものの情となる社会性は物なる
ものの情となる而して其好き通りとなれば快となる然らざれば苦
となる

孟子と墨子とが快苦の所在に付く論をしたる美醜は自分の身に在
るか外物の方に在るかの問題となる墨子曰く美醜は外物に在り美

人と美とするのは美人の美なるか為めとなると孟子曰く美醜は自
分の身に在る為するものは飽を好み飢ふるものは食を好むのとな
ると之は水掛論となる

我々の論は美醜好悪快苦は二者の間の関係となるとこふのとな
る故に無生物は無生物を好み其他を好ます植物は植物を好み其他
を好ます婦女子は婦女子を好み其他を好ます男子は男子を好み其
他を好ますず小人は小人を好み其他を好ます君子は君子を好み其他
を好まないのとなる

異論に曰く進一も上等のものを好むも下等のものを好むものは
ないと係一なるから下等よりのは上等の趣味を解するの能力なく第
つて之を嫌忌し同醜相求めの同病相憐さのとなる

又異論に曰く男子の好みは揺る男子のみに限らず婦女子を好み

動物を好み植物を好み無生物を好むのである。我々の心は一の博物館で新に陳列される無数の男女婦女子動物植物無生物の絶えず其社會性の好惡を為しつゝあるのである唯此等は小なる模型であるから其好き所のものは大なる実物である

之は又社會性の展開し得べき範囲である即ち習慣性と同一く必しも精確なる同形同大ではないのである例之は我々人間にしても其身長容貌總てのものが全く同様でかゝる事はないとは行かぬ部つて千人は千人落人は落人まで多少必ず違ふ所がある違ふ所があつて都つて便利である若し少しも違はないとなれば人に誰彼の見慣か立たなくなつて困ることになる

加之斯の如き範囲のあるのは我々好惡の情に強弱の差別を生ずる所にある即ち精密なる同形同大に對する所の好みは最も強く其形ち其大さの異なるに従ひ其好みは段々弱くなるのである

故に我々は其性質形態等最も自分に似て居る所の親る間の好みは最も強烈なる所の情である之に比肩すべき強烈なる情は他にないのである若しも最も高貴なる所の性情にして他の愛情なしとは全然之を區別せねばならぬ喩之は男女の愛の如き一方の愛に對して他方の尊敬を要求し一方に欠くる所あらば一方にも之を欠いて物はないのである親る間の情は之とは違ふのである親はより何等の報酬を望まない子は親不孝でも親はその為めには我身の衣食住は勿論生命をも之を犠牲として厭はない寧ろ親はその為めには死に上の苦痛をも甘受し唯たゝ我子の良くなれかしと待るの外はないのである

第十八章　三元結合論

三元の結合は世界の出来上った有様である。

三元は三元ながら一つに結合して居る結合せずに在ることは出来ぬとゝふのは分解して仮に孤立せしむることが出来ないとゝふのである。

他方より分解することが出来るのである。例之ば空元も本元も時々刻々に前の時元と分離して後の時元と結合し又本元が彼所の空元と分離して此所の空元と結合するとゝふ様なことは無論出来

第十九章　單元主要論

單元主要論は各元の性能発揮の論となり結合となる三元の論となり各元の論となる各元が他元に結合することの論となる

第二十章　汎比元主要論

汎比元主要論は各元が化素乃至質素に結合したるものゝ論である

之は頗る其性能を発揮したる所の各元である六つの場合がある

変化は体素に結合せる所の時元にして其例は昼夜四時時勢の変遷等である

事相は質素に結合せる所の時元にして其例は生産貯蓄消費等である

変動は相素に結合せる所の空元にして其例は行動波動震動等の類である

物體は質素に結合せる所の空元にして其例は粉糸板煙機械等の類である

事實は化素に結合せる所の体元にして其例は音響熱光電氣等の

類である

物質は動素に結合せる本元にして其例は化学上の諸元素化合物

混合物等である

第二十一章　變化論

變化は體素に結合した時元である

一説に曰く世に變化ちうか故に時間かある變化なければ時間かない時間は變化の產生物ちうし然らは變化の劇しい所は時間か多く劇しくない所は時間か少く變化のない所には更に時間か經ぬとちあことになる然れとも時間は動る所示内に經過する器等ち時間に二つはなく一つ時間ちる唯然るは時間の長短を計るか為めに其標準と變化に籍るうて例之は時計の長針の廻轉を一時間とし地球の自轉を一日とするうてあるちの之は空間の大小を計るか為めに尺度秤目等の物体を籍ると全然同樣である

故に變化は化素の運力と同しく時元である唯体素ち形状に結合したる時元である

時元の一の時期は体素の一の形状に結合すること
かてある一の形状に結合すること上他の総ての形状に結合すること
は出来ぬ之に其時期の破壊かてある此構成か破壊かは其時期の自
性てある
異論に曰く時元は無か無性てある構成も破壊も全く外物の力て
ある事に其形状に接觸する所の器械の力てあると係しなから如何
に力の大なる外物ても時間か無ければ何な形状と雖も構成も破壊
も出来ぬのみならす更に外物はなくとも物は其自身に形状を変更
する場合はなくないてある
此自性即ち第一時期の構成破壊は第二第三以下の構成破壊より
其取るへき形状に制限をかくる之は第一時期か其後の時期に対す
る所の能性に而の時期か原因縁の時期か結果と略して因果とも云

ふのてある
保し普通に云ふ因果の理論なるものは斯うてある曰く「同」の原
因より生すへき結果は必ず唯一つに定して在る又同様の原因より生する
結果は同様てある又異様の原因より生する結果は同様のことあり
異様のことあり此説に従へは斯う云ふ結論になる曰く多くの種
類より又多種類になることか出来る曰く多くの種類
か生することは出来ぬ故に世の中は複雑の有様より単純の有様に
なることは出来るも単純の有様より複雑の有様になることは出来
ないのてあると
我々の疑は反対てある曰く「同」の原因より生し得へき結果は唯一つに
定まるのてなく種々の結果か生し得る右か何なりのて生し得
ると云ふてはなく一定の限りかあるかて生し得へきものと生し得く

かゝさるものとの區別ゟ範圍かある又同樣の原因より生し得へき結果は之は同樣の範圍てあるし又異樣の原因は其結果としても亦其別異の範圍を有し決して同樣の範圍ではないけれとも其別異の範圍中に共通なる互に同樣の結果を含むことかある是れは其原因か互に類似して居れは類似して居ると共通の結果を含むことなく又其相違か甚しくなれはなるほと含む所の共通の結果か少くなる結局には全く共通の結果かないものになるのである

第一時期に於ける自然の原因の形狀は唯一である

第二の時期に生し得べき結果の形狀の範圍は非常の多數である原因と同一の形狀も未含まれて居る他の形狀にしても其違いの少きものあり多きものあり然れとも其違いの最も多きものにしても其差化の程度は在りて微々たるものにして此等を總て概して類似中の最も類似せるものと稱する

次は第三の時期である第三の時期に生し得べき結果たる形狀の範圍は右の類似中の最も類似せる總ての形狀を第一原因と有似し其第二の結果と有似すべき總ての形狀を網羅する所の範圍である

右も此類似中の最も類似せる原因には其結果として互に共通のものと最も多く含むものとある故に若し此等の結果を第一原因より直接に生ずる第三結果の範圍として立て一括視するか其割合には多數になるなるべきものである

第四第五に下順次同樣である唯其結果の範圍は漸々廣くなるべきけれとも

斯くて第一の原因は第二第三に下の結果を其範圍内に制限するも第二第三に下の時期は其範圍内の總ての結果を實

現し得べきものではなく其時単に一つの形成と積極的に保持されねばならぬ此積極は先づ第二の時期に於ける新の自性と第三に下の時期に対する新原因となりて此等の結果を更に制限し次に第三時期の自性積極は来るのである

世の中は斯の如く原因に原因が重なり結果の上に結果が集積して前の形成より後の形成にまた推移変遷するのである我々境遇の事実の如きも無論此因果の理法を免れないので過去に於て自分々々で作った所のものの積り積りて今日を現出したのである

第二十二章　事相論

事相は質素の結合せる時元である

一の時期は其自性として結合すべき質素を定める之は生産力又は貯蓄力である時元の力である事に対しては之を消費力と云ふのである何れも時元の力である事は異論者は之を物質又は智力の結果であるかの如く思って居る是れあた主客転倒の考である

第一時期の生産消費は第二第三の時期の生産消費に制限を与ふる之は資本と貨物との関係と前に説く資本後は貨物である

此資本貨物の関係も原因結果の関係と同様前より後を制限することは出来るが後より前を制限することは出来ぬ之を不可逆反の原則と云ふのである

此逆行逆運ふへからずと後に云ふのである

古代より後に及ぼす所の制限は始めなりの過去より統なりの未来に至るまでも其影響を及ぼして止まず、是れ亦た資本貨物の関係と原因結果の関係も全く同様にして之を永久無限降下の原則と云ふのである

此永久降下の原則に於いて世間に種々の誤解の出る其れは此原則に結果不滅論と云ひ紛れ易い名称が付せられて居るので或者は此不滅なる文字に拘泥して一の結果は其自身其儘永久に存続するかの如くに考えて居る例之ば柱に疵を為せば其疵は永久取り去ることが出来ぬと云ふのである柱は有形であるが無形の行為に於ては斯る云って居る所の過去に在ったことは未来から取消すことは出来ぬ何時まで経っても有ったことである所ちろん不滅であるが之は不国及の原則を轉用した曲語である昔有ったれば昔有ったである何時まで経っても昔有ったである今は滅して無いのである

第二十三章　變動論

變動は相素に結合せる空元である

一の点は其結合すべき相素即ち調子を定める之は即ち其点の映出作用と其結合せる調子に対しては之を振動作用と云ふのである何れも其点の自性である

一点の映出振動作用は他の点の映出振動の作用を制限する之は能性である

其制限は周囲四方八面に一様に及ぶ例之は私達が何か聲を出せば其れが周囲四方八面に響かるのである之を空元の十方影響の原則と云ふのである

其聲は遠くへ響かるに従い段々低くなり薄くなり終には全く聞こえなくなる其では其聲は遠くへ行かぬのであるかと云ふに其う

て居ない。仮令我々は其聲を聞かずとも其聲は何所までと云ふ限りかなく無限の宇宙に響渡って止まないのである。唯我々の耳が之を聞き取り得ないと聽く出来て居ない丈のことである。之を宇宙の無限響の原則と云ふのである。

斯の如く一点が他の線での点に響すると同時に他の線での点よりして又同様に之が影響を受けねばならぬ。之を宇宙の相互干渉響の原則と云ふのである。

此等の宇宙の原則の効用も偉大である。我々が太陽の光熱を受くることの出来るも其賜である。星を数へ月を賞し鳥を聽き花鳥を愛つることの出来るも其恩である。若し此等の影響が無かったならば我々は如何に明らかな眼を持って居ても盲目同様、我子の顔を見ることも出来ず如何に聽い耳が有っても聲同様親の言葉を聽くことも出来ず如何に大きな聲を張り上げても唖同様人の耳には何の感一も起らないのである。斯の如く親しく来れば斯の如き大原則を有する所の大宇宙は我身体以外の他物に非ずして寶に我々の為めの大なる眼我々の為めの大なる耳我々の為めの大なる口我々の為めの大なる手我々の為めの大なる足我々の為めの大なる皮膚我々の為めの大なる身体であって全宇宙は他人でなく我身であると云はねばならぬ。

第二十四章　物體論

物体は實素に結合した空元である

異論に曰く物体と空間とは別物である物体は空間を排斥して存在する物体の在る所空間なく空間の在る所は物体なしと之は空間排斥論である

他の異論に曰く物体と空間とは別物である係りながら互に相排斥するものではなく寄つて物体は空間を填充する即ち同所に在る蓋し空間は如何なる物体と雖も必ず之に侵入して居るから到る所空間ならざるはなしである之は空間填充論である

我々の説は物体と空間とは別物でなくして同一物である物体は空間である空間なくして物体の存る様はない空間は物体の要素であると云ふのである反對論者は曰く物体は我々の五官を以て感知

し待へきも空間は我々の心に直覚するのみにて五官に感知することの出来ぬものなる係りなから我々の五官はよく空間を感知する我々か物体の形状を見るのは我々の眼かよく空間の形状を見るのである我々か物体の大小を計るのは我々の手かよく空間の大小を計るのである

空元の十方影響の原則無限影響の原則相互平等影響の原則は物体に於ても妻帯に於けるも同様である従つて全空間は他人でなく我身である妻帯は生涯の如く物体は組織の解剖の如くである然るに善直陸で自他の境界を立て其間に城廓を構えて自ら狭くするものかある其境界にけし瓦れ九種の些説かある本体説心我論身体説一蒙説因業説天下説伸縮論宇宙説全空間説である

本体説にいく真の我は我本体限りである其外は皆他人である

心我説に曰く我は我心大である我に直接に到るものは我心のみである其外は総て間接で其有無其真偽さへ確かでない斯の如きものを自分と云ふことは出来ぬと

身体説に曰く我は我身体大である我身体は常に我を離れず且我意の命令する所行之を奉行して誤らない我身体以外のものとなるも我を離るるものなく我意の自由にはならないから之は他人である但し信じ合なから我を離れぬと云ふなら我家我国は別として地球も宇宙も大なれば大なるほど我を離れないのである又我自体になると云ふことなら我身体は何れも自体になるか今胃腸に過量の食物を取り直ちに消化せよと命じ又手足に向つて休息なれに仕事を命じたならば何である胃腸手足は必ず不満を発して我に反抗し苦痛を訴へるに相違ない何である病気は身体内の一

接暴節である。

一家説に曰く一家又の我とあると云ふのは現家族系に財産に我の所有である我の所属である其一家の利害は取も直さず我の利害であるからである。

国家説に曰く我国家は我であると云ふのは我家を指し我身を指し亦利害結合を共にする所の国体であるからである。

天下説に曰く天下は我である人為も交はるに其道をもつてせば天下は皆我味方である味方である以上は我である。

伸縮論に曰く我は大ともなりわれともなる我は人と交はるに其道をもつてせば他敵も尚味方となり其道をもつてせざれば骨肉も尚他敵となる味方の増えるのは我の大となるのである他敵の増えるのは我のわとなるのである。

宇宙説に曰く宇宙は我である味方や他敵の多少に物ける多少乃至総ての他敵であつても宇宙い我である如何となれば之を小にして我一身の体にも他敵なる所と疾病の所しかある健康なれば快楽を覚え疾病なれば苦痛を感ずる然れども健康なる部分のみが我身にして疾病の部分は我身に非ずしかりとせば之れを疾病の部分に非ずしかりとせば無関係と快楽と苦痛を感ずる余はないか我であれば苦痛を感ずるのである天下となり宇宙となつても其理は同一である而して我は宇宙の状態にはいと快楽も覚え苦痛も感ずる味方が多ければ楽しい我である他敵が多ければ苦しい我である故に宇宙は我である斯の如くして世間の動産は我身の血液である諸子の倉庫は我身の胃腸である太平洋は我庭の泉水である無数の実験を経尽くしである地球は我定に着けたる所の産物である玉乗りである之

に従つて太陽の周囲を廻る所の惑星は恰度箱の裏の模様となる宇宙はかゝる跡の石塔いちる

全宇宙説に曰く全宇宙は我々の宇宙説と構造するまゝのことである無限大の全宇宙は我々の書て通過せる所の現に見る所は我々の今経再三再四通過すべき所である

第二十五章　事實論

事實は化素に結合したる本元である

之は本元の変化性である方丈記に曰く行く川の流れは絶えずして若しも本の水に非ず淀に浮ぶうたかたは且つ消え且つ結びて久しく止まることなし世の中に在る人と住家と亦斯の如し然らはなぜかゝるかと問へば流れ来る所の水は未だ一度も流れて来たことのない新らしい水である其れが絶えず流れるとそれは其分量も多大でなければならぬ其大の水と貯へてある水源は何所にあるか

又其流れたる旧い水は何所に消つて居るか

流れた水は海に入る海の水は蒸発して雲となる雲は降つて雨となる雨は集まつて又もとの流となるのである尤も川の流の数は一つでないけれども順次に繋り迄一つに行けばなほ一つである

水は斯の如くして循環する其れも一度二度てはなく幾百千萬億回すも窮限りかないのである世の中に在る人と住家と亦た斯の如しである

此世の住家は川の流れの淀みである同一淀みに宿る且つ結ぶ泡沫は獨り我のみではない續てその元るは皆後になり先きになり幾度となく入り替り立ち替り循環する但し二以上の元るは同時に同一所に現出することは出来ぬ之れは元る相互間の排斥性である

我は我自身過去に於て幾度となく自分て自分の祖先となつた我は我自身未来に於て幾度となく自分て自分の子孫となるのである

係りなく自分は自分の親となり自分の子となることは出来ぬ

自分の直接の父母自分の直接の子女は何らしても之を他人に待なければならぬ

我現在の父母我現在の子女は過去に於て幾度となく我父母として之を慕ひ我子女として之を慈しむたのである未来に於ても亦た同一く幾度となく我父母として之を仰ぎ我子女として之を慈しむのである

獨り我現在の父母現在の子女のみならず有りとあらゆる總ての人は皆過去に於て幾度となく我父母として之を慕ひ我子女として之を慈しむたのである未来に於ても亦同一く幾度となく我父母として之を仰ぎ我子女として之を慈しむのである

況や親の親子の子即ち祖先として子孫とする所の関係に至つては既に全く度数の問題でなく古今未世上の總ての人は常に絶えず現實の我祖先であると同時に現實の我子孫である

其譯は我は一人であるが我父母は二人祖父母は四人其から八人十六人三十二人六十四人と一代毎に二倍の數となる尤も其間には共通の祖先もあるが仮に無いものとして計算すれば自分より八代前の先祖は二百五十六人十六代前の先祖は六萬五千五百三十六人三十二代前の先祖は四十二億九千四百九十六萬七千二百九十六人六十四代前になると其數は二十桁の數字より成る所の大數である

此等は僅か二千年と経たる間の子孫の方も其通りである我前生は何時であったかなれども其れより二千年とも経たる間に地球上の總ての人口は皆我真の血を分け傳えた所の子孫となって居る

世には大恩天よりも高く地よりも厚い親を見捨って生前の不孝を悔ある人も多く又我身にも捨え難き可憐の子女を先き立たい悲

嘆の涙に暮さゝ人も少くない其親其子が今何所に何うして居るかとたゞ一度の利つたならば其人は之に替して如何なることをするであらうか其親其子は誰にもあらず現在世上に生死を繰り返して居る一切の人衆である一切の人衆路上の孤獨皆我子又は我が親である子である皆悲しく感かれ果ては死に別れた所の親である

第二十二章　物質論

物質は動者に結合したる本元てある又本元の行動性てある
本元の各元子は動素の一の道路を取る其道路の多いサより何れの道路を取るかは各元子の自性又自力と之を元子の自動性と之の又其取らさる所の道路に對しては之を不動性と云ふ性質とも之を自性論又は自力論とも云ひてある
唯論に曰く物は總て自力て動くことか出来す他のものによりて動かさるものである之は他性論又他力論てある係りながら太傷何ものけと云ふ偏見とも云ふ故事の諸天体には之を適用すさいと
物質は之を引つ張る所の境界事てなくてある
る其点にはいて或説は斯うゐつて居る初め一度他より力を與へれは其先さは自分て動くて居るものてある其らすんは初めの一時間

又か他力で其後は自力でやるとかいふことになる。加之其和合の力なるものは何か無へるものとなるものと云ふと其れは矢張り他の本元で
ある其うなれば其他他論と雖も一部の真理を有するものと之を精
確に云へば之は本元の所動性又受動性である
而此動かすべき所の受動性の他力論を其反背の動かす方から見
ることは之は能動性となるものでもあり動かさるゝと云ふことか
ら見れば同時に動かすことも出来ねばならぬ而して此秘動性は自動
性の道路を以て他の元子の敢へて道路を制限する又のことゝなる

斯のごとくして結局自性と受性との合性によりて各元子の行動が
定まり此等行動の種類によりて物質の種類も定まるのである
我他の本質も亦た右往左往に行動する無数の元子の一群である

此等の元子は互に相離れ又相接して交際を為し一つしかる我一元子
も其他に存して主従の如き関係かなり我より出張して視察したり
命令を下したりすることもあれば又我に来って報告を聞らし命令
を与ふることもあるなれば孔子曰く仏道に在とされは見れども見
えず聞けども聞えず食して其味を知らずと

第二十七章　肉體元素論

肉體元素論は各元が要素乃至物素に結合せしものと各元とーては十分其性能を発揮したものである三つの場合がある

終始は物素に結合せる時元にして其例は事業である

本末は事素に結合せる空元にして其例は機能である

事物は要素に結合せる体元にして其例は博物である

第二十八章　終始論

終始は物素に結合せる時元である

時元の各時期は物素の社會性に結合する其如何なる社會性を取るかは其時期の自性である

故に同一時に在りては世の中到る所總て同一物のみ存在し此は如何なる社會性をも雜多なる別種類樣のものが散布して居るのに過ぎはたはなくして到る所種々雜多なる別種なる社會性が前の時期の社會性に引き續いて生じ得べき結果の範圍外のものであるが爲め其社會性を現出せずして能はず此生する所の班紋である性情が如何に強熱でも能ぬの制限たる道理を拉くる譜には行かぬのである斯の如く道理の爲めに性情の矯めらるゝが快の反對の苦である

絶対の例は事業である我々は將来のある時期にある物を発生せしめむとする期望を有する之は目的である其目的に達せむが為めの手段を取る之は方法である其方法を施すべき従来の状態がある之は機會である此機會と方法と目的とが事業の三大要件である

機會に対して種々の説がある曰く我々は何事を為すにも機會の熟するを待たねばならぬ其代り機會が来たならば之を逸してはならぬ之を逸せば萬事休するなると又曰く我々は機會の来るのを待たず進むで其来るを促がさねばならぬと如等の説は機會の無い場合を想像して居る係りなれども我々より之へは時々刻々絶えず機會である機會のない時はない唯其應じて為すべきことが適切なものである例之は農夫である田を耕して来を蒔く係りなれども種を蒔き放しにして其生長を待つてはならぬ朝に晩に絶えず之を見廻らねばならぬ桑苗の樣子はどうであるか水はどうであるか肥料はどうであるか草が萌えて居らぬか虫がなりて居ぬか元気はどうであるかと自分の身体が田を離れた遠くに居る時でさへ稲に関する所の心配は一刻の弛みもないのである たゞなければ良い来の熟るものではない

方法に関して十説がある曰く目的を達せむが為めには迂遠の道によらず如何なる方法にせよ捷径を取らねばならぬと之は捷妻を弄する所の奇道である又曰く我々は捷妻を弄してはならぬ厳然公明正大の常道を取らねばならぬ我々の目的は単に一時に止まらぬ然るに奇道は一時を欺くには便利であつても他時を欺くの為めには却つて妨害となるものである古語に曰く巧偽は拙誠に若かずと蓋し曰く唯常に在る珍らしからぬ事の僅に仙得た

らむ皆直みへからずして常道をと健全なる大方法はなく隙なし得く
き目的ならば之をはたしかすべかすることが出来るのである
目的も高た種々てある一時を熱望するもの常を楽むもの眼近な
るもの高大なるもの次一て一様てない今我々一身一生涯の目的を
㊟へて見れば下のごとくてある
我々は産れたけりの時は乳児てある父母の懐に在つて未だ獨
立の別体を為すに三四歳の頃より種児てある父母の膝下に戯れて
天真爛熟なる間てある
和年は八九歳位からてある孔子曰く男女七歳にして其席を同ら
せずと始めて男女の別かあり婦女子は男子の下に住し婢女たるへ
きもの此時代は普通の学術を修め天真爛熟より進歩して確の悪い
ことの利り正直をはて其徳とする

若年に及ぶと己の専門の学術を修める正直の徳は更に進歩する
孔子曰く親はるの為めに隠しまは親の為めに隠す直其中に在りと
義侠色に形はれすと云ふ所てある婦女子は貞婦としてはを修むへ
きてある
壮年に至ると男子は各自の学び得たる職業に従事する国家の事
業てある貞婦は賢母となるべし此時代は義侠色に形はれる
もの徳は更に進歩して禮となる俗に云ふ嘘と方便て恩威並び行ふ
のてある世間には仏得道のものかある世帯を持つて整事を望み子
女を挙げて楽みに為さいなと、唯安楽の一方を夢みて肝胥な勤め
を疎略にする之の為め業外に存らぬ苦楽を増して愚夫愚婦となる
のてある世帯を持つては獨身よりも仏道か多くなか為るれは更に多
く苦か為るれは其上にも高更仏道か多くなる傍し之か即ち人生の

目的となりて其一面には真正なる快楽が伴なはれゝの人間生活の大の慶事である。

先帝に遵すれば已れが専門の職業に就き経営し得たる所を後進の子弟に授くるの地位に立たねばならぬ天下後世的の事業である恩師第一所の徳より更に進歩して今は国家一方の慈悲心となるのである。

最後は高齢である慈悲心は極度まで進歩して永久の宇宙に対する大慈大悲となるのである。

孔子の所説教えて倦まざるものにして撰言すれば道徳を教ふる所の聖人である世間には聖人のおさは無百人の到底企て及ばざる所なりと為すものかある偉しなから苟くも堯舜は已れなから已に具はるものに非ざるなり堯舜人なり我も人なりと之聖人なるものはれて釋迦耶蘇の如く偏く世人に唯し主

てられねばならぬ。

曰く恭伯夫れ主徳と云ふへきかな主たれば天下を以て養ふ人得て之を称するなり。

第二十九章　本末論

本末は事素に結合せる空元である

空元の各点は事素の習慣性に結合する其如何なる習慣性を取るかは是亦た各点の自性である

故に同一の場所は常に同一の習慣を固守せねばならぬ筈である

のに實際は然らずして時と共に別異の習慣が産出せらるる訳はのかは各点即ち諸方の場所に於て甚取らざる訳の習慣化か空元の相互緊縛の原則上互に睦着して相紊れざるものなるが為に生ずる所の要因である

本末の例は樹園である今我を中心とすれば第一は方面の異なるに従って樹園の種類は遠近例之ば眼は見る耳は聞く口は言ふ手は持つ足は歩むの類である第二は我を去ること遠近によりても樹園は

同様でない。例えば心あり身体あり歳あり闇あり天下あり宇宙あり
と云ふ次第である。

或る場合は此等種々の機関を能と素との二種に大別して居るは
ら外に傳ふる所の能動機関と外よりは内に傳ふる所の受動機関と
である。曰く口手足等は運動機関である眼耳鼻舌皮膚等は感覚機関
である。之は能変別機論である。保しなから眼は物を見るに外に又
よく物を言ひ手は物を動かすに外に抵抗を感ずる。加之健康とか疾
病とか云ふ如き機能に至っては何れの機関と同じく入っても果れ
は出ても行くのである。

故に又能変別動論がある。曰く何れの機関にも能動が起れはよ
り外に傳はり受動が起れは外よりは内に傳はるのである。しかし偖一なか
ら同一機関に時を異にして或は能動が起り或は受動が起ると云ふ
様に別々に起るものではない。手が物を動かせば之と同時に抵抗を
感ずる。口で物を云へば内には今何を云ったと云ふ感しがある。

故に又同動異才論がある。曰く同一機関に起る機能は同一である
が其はへ向ふ所の異なるが受動で外の方へ向ふのが能動である。之を
傷明の紅行同一論は正しく此意である。智は即ち能で能は即ち智で
ある。能なき所に真の智なく智なき所に真の能はないのである。

尤も多くの機関の中には自己独立の機能を八方へ傳へようみて
なく取捨即ち一方より入れて入れた其侭を他方へ出す丈の機関も
ある。仮令取捨丈にしても其取捨いたとこふ報告即ち復命丈つに
とはするから是亦機関を区別する一標準にはならない。

要するに何れの機関も皆夫れ〳〵の専門長所即ち特得の機能が
あって其れは習慣化の種類と同様である。

中に横関の我にも専門かある而して専門に外のことは總て駄目てある例之は心は如何に直接に物か見度いと云つて眼の助を假らは出来ぬことてある手は如何に丈夫ても足の代りにはならぬ大工は如何に美麗ても石屋の真似は役に立たぬものてある然るに世間には美麗とは云て誇りとする者かある帯に短かく襷に長くの誹を免れない孟子は陽相に向つて曰く許子は自ら種て而して食し自ら織て而して衣る許子は釜為を自ら冠を織らず自ら釜甑を作つて爨かさるかと孔子曰く予れ老農老圃に若かすと又曰く君子多なら むや多ならさるなくと又曰く聖人は能はさる所ありと

故に徳て美麗なるものとは自他を通用するものてある其専門長所によつて之を用ゐるのは利用てある之れか健康と疾病との岐る所てある通用するは疾病てある所に胃腸の役を余す

るかさるものてある利用するは健康てある自分は自分の専門丈のことを為す物を見度くは眼て見る見る為めの眼てある歩行き度くは足て歩行く歩行く為めの足てある米か入用なら米屋から買ふ其の為めの米屋てある知らぬことは知つた人に問ふ其為めの智者てある出来ぬことは出来る人に頼む其の為めの能者てある苟子曰く君子の生は異なるに非さるなり善く物を假るなりと又曰く知らされは問ふ問ふ純はされは問ふ蓋ふと孔子曰く君子は人を以て人を治むしもの何なる樣閑と雖も是以上のことを望むては失望せさるを得ない其代り是丈のことか十分に出来れは其れこそ智能健全の極度て最早是れ以上の修学多きはなく是れ以上の一切種智なく是れ以上の全智全能もないのてある吾も取て直さず大聖人てある此上の聖人はないのてある伊如来てある此上の伊如来はないのてある

る神とする以上の神はない、のである

第三十章　事物論

事物は要素に結合する本元である

本元の各元子は要素の性に結合する其如何なる性を取るか

は是れ亦た各元子の自性である

故に如何なる物も雖も總て厳密なる同方同速の行動を為されは

なるべき筈であるのに球上は何一つとして此同方同速の行動を遂行

するものを見受けないのである とそふのは各元子の取る所の性

が互に相衝突して元子相互間の制限乃ち凝縮性又排反性なるもの

に相觸するが為めに元子又は總て同方同速の行動を取る

能はず非常に複雑なる訳動を為して居るのである

事物の例は傳物である球地球上に於ける事物の種類は人間動物

植物無生物の四大種に大別されてある係りなから此地球以外に人

間に上に進歩せらるゝ、在至せんとは限られなく、

此等のものは總て研究する所を人間を首め動物は勿論である。植物は生長する無生物にしていえば天体の運行より近くは風が吹く水が流るゝ之をかにしては分る所る震動するつてある。

斯のごとくして所元の元素が總て互にのり乳せて活動する所る或一元素も此等と互に或は結合し或は離散して絶えず種々の関係に於てある。例之ば我々の身体は絶えず新陳代謝の作用を営むと同時に一方空気を吸ひ飲食を取ると同時に一方蒸気炭酸気其他のものを体外に排泄する此蒸気炭酸気の類は大気となつて地球の周囲を吹き廻り雲を起し雨を降らして偖く一切の人畜草木を養ひつつ其血液となり筋肉となり骨髄となり脳髄となるつてある然また此等の人畜草木も亦絶えず新陳代謝の作用を為して其体外に排泄する所の蒸気炭酸気の類は又騰て大気となり其他となつて我に来り入つて血液となり筋肉骨髄となり脳髄となるのである故に一度我心身を組織した所の本元が常に転つて他人の心身を組織し亦第三者第四者の心身を組織するのみならず之と同時に一度他人の身体を組織せる所の本元は是れ亦總て巡つて順次に我心身を組織するのである故に他人とゝふ他人は誰彼の差別なく總て我身の代身である我身はまた總ての他人の代身である

第三十二章　二元主要論

二元主要論は諸要諸事諸物の三種である

諸要は本元の結合せる要素にして其例は情性の複雑となりたる傳播性である

諸事は空元の結合せる事素にして其例は習慣性の複雑となりたる遺傳性である

諸物は時元の結合せる物素にして其例は社會性の複雑となりたる繁殖性である

第三十二章　諸要論

諸要は要素の本元に結合せるものである。

今二つの元素が共れを情性に続つて進行したが互に衝突したとする二つの元素は其れて止まるものなく、しかしその路を逆に戻るものなく、元素は変方共自分の情性を相手に譲り相手の情性を自分に譲り受けて其面り新たなる進行を始めるものである事も情性の交換である元素よりこへは情性の交換であるが情性よりこへは元素の交換である情性は元素を取り換えてもしかの通り自身の進行を続けるものである

次に又衝突かあれば又と其元素を取り換えて第三第四と際限なく進行し厭まへる情性其自身を逆行して止まないのである之を諸妻の傳播性とこふのである

蠟燭に点火すれば火光を発して熱を鐘を撞けば音響を発して鳴る之を第一の出発とし之より光線又は音響は周囲四方八面に発散して第二第三以下の運行を始めるのは諸事に於ける無数の傳播性に外ならぬのである

其時を同うして八方に分散するものを保財と云ひ其時を異にして一方にのみ射出するものを運財と云ひつゝある

運財の方は其射出の調子に従ひ其光色に黄赤青其他の区別が生じ其調子の変ずる限りは其光色も変じないが保財の方は其敬開する距離の遠近に従ひ厚薄強弱の度を異にし遠くなれば遠くなるほど稀薄となるのである

我々日常の目撃する所斯の如き第一の出発と云ひ保財の稀薄と云ひ其他或は屈折し或は反射し或は集合し或は分解し或は吸収せるもの之みなら或は運動は熱となり音響となり光となり電気となるなどこれらの類が多く同一の性質其自身が厚さと遠近とに拘はらずして伝播するのとは限つて居ないのである之は取も直さず性質の同速同方性に属せざる範囲のあることを示す所以である

其速力の例を挙くれば空中に打ち上げる石は漸々其速力を減じ落下する所の石は漸々其速力を増すのである其方向の例を挙くれば諸遊星の運行する所の軌道は一直線でなくして總て彎曲してある

然るに今日の所者惰性を以て厚さ精確なる同速同方なるものと為し此等の現象に対して解釈を試みて居る曰く遊星の軌道の彎曲なるは遊星の遠心力なる惰性に対し太陽の引力が働らく結果したるもの其引力の所在に於いては者は引力自体は太陽に於つて其

作用は飛離れた惑星の所に起るものと云はれてゐたが近来は引力自体と其作用も同一の所に無ければならぬと云ふので太陽と惑星との中間点の点に感ぜさる媒質中に在るなしと云はるゝに至らんとする然らばこれら惑星の位置の移転する毎に引力の方向は時計の針の如く廻転せなければならぬ斯くの如く方向の異なる所の引力は早く同一の引力であるか又は各別の引力であるか若し同一の引力であると云ふならば惟性の同方性と無視することゝなるべく若し別々の引力であると云ふならば前の引力は何所へ去つて後の引力は何所より来たるものであるか或は惑星の在らざる所に常に媒質中に残存するものなりとせは其れは太陽より何れの距離にまで在るものであるか又斯の如く毎年消滅さるゝ所の引力は何れの所より之を補充しつゝあるものであるか

又曰く石の空中を上下する惟性に対しても地球の引力が絶えず働らく為めに遅くなり又速くなるものであると曰つて其理由を詳説し曰く石を或力を以て空中に打ち上くるときは其力が例次石から吐き出されて其途中の媒質中に移る之が取り直さず引力となるものである而して石の内なる力が全部吐き出されは散乱其儘上に落ることが出来ずに止まりて其石は再び引力の為めに地面に向つて落下し始めるが今度は前と反対に媒質中の引力が媒質より吐き出されて石に移り而して其速力を速加せしむるものであると信じ益々前らなるものである故に打ち上くる為めの上に向つた力が何故に徐々には引力の加さ下に向つた反対の力に変ずるものであるか又打ち上くる石の力が全部吐き出されたならば何故何時迄も其点に静止して居ないのであるか又力が打ち上くる時に石から吐き出さるゝ

ものならば何故に打ち下ろすときにも石から吐きだされないのであるか

而情性の屈撓し得べき範囲のあることを證明するものは潛勢力と顯勢力との區別である潛勢力は全然運動のないものとえげんと云はれた運動のないものが自ら運動を起すべきものであることゝなる其所で近来は潛勢力と顯勢力との區別は單に運動の代わに過ぎざるものと云ひなるゝに至りたるに同く顯勢力は粗大なる物体の運動を我々の眼に見得べきものの潛勢力は今日唐突のぬき微細なるものゝ運動を我々の目に見難きものに過ぎざるも其運動の量は変ずることはないと然らばそれある大なる運動が一局部にのみ同量の小なる運動に変ずると云ふならば其力は全然方向を変えたものと云はなければならぬ方向を変ずることを否定するならは小運動の速力は新に発生したる速力と云はなければならぬ

故に諸要の傳播は到る所情特に変化さるゝものである就中屈曲に富み複雑にして之を有取することの最も困難なるは人の心である

直言は人の言語動作によりて之を推察する素好曰く名を聞くより面貌は推測らるゝ心地すると見るときは又かゝれて居へつる依の顔したる人こそなけれと之と同一様なりの顔を見るよりかゝて心根は推測らるゝ心地すると名は名である面貌は面貌である

言葉は言葉心は心である駐蘇曰く偽りの誓を立つることなかれとは仏等の既に聞し所なりまれと我邦に仏等に苦む誓ふことなかれ

唯然りと否と云へと

第三十三章　諸事論

諸事は事素の空元に結合せるものである

此所彼所四囲の情況により同一の場所が同一の習慣性を基礎することの出来ない様になっても其習慣性は尚其場所を離れても厭まず同潤性を遂行せんとして止まない。之を諸事の遺傳性と稱する。

例之ば我々は一七歳五十年八三百年間に種々の経歴を為すのであるが其れは父子間所他所の子孫に遺傳するのである子孫の顔は祖先の顔に似る其体格も似る挙動も似る青聲も似る悪想も無論似るのである祖先は梁をすれば子孫も梁をする祖先が妻めば子孫も妻み祖先は善を為せば子孫も善を為す我は不孝とすれば子孫も不孝とする。之普通に死亡は一切の罪苦を脱して新七歳に入るもの

い如く考えて自殺と行ふものか古る知らす罪苦に自殺するの遺傳と貶し去孫をして立を繰り返さしむるに至るものなり

北斗は敢て子孫か親の為す所を見真似同真似をするのてはなく晋楊震か天知る地知る我知る人知ると云うたか遺傳は其れに上て為る親族にも知らさす極めて密かに為したることも子孫は必ず其通りに立を繰り返すか乃至親は自己心中に立を秘し敢て面貌にたもあらはさすしかも子孫は必ず其通りの形を心中に繰り返す故に此遺傳性なるものは実に剣刃を押し石に刻み全に彫り付けて立と傳ふるよりも遠かに明晰確固たるものてあり恐るへきは遺傳性のみてあり

係一なから習慣性と同しく遺傳性にも其度程に拘束せられ固かる故に子孫と雖も仍一も祖先の通りと云ふてはなく其志願によつて従来の遺傳を或る程度まて変更することか出来る

志願と云ふのは我々の理想て現在の状態を変ずる所の状態を現在に於ける我々の心中に画するものてあり世間普通の人か全く恐しい名か恐しいと云ふか様な野蛮なのか多いか高尚な理想になると天下後世の進歩をもたらす徒つて普通と変在せさるものを理想とするのである一説には我々の知識は外界の実在を反映するに止まり未た実在せさるものを考えることは出来ぬと云ふのてある此説は誤りてある寧ろ我々は我々の心中に於て現在以上のものを創設し絶えず外界の先導者となり諸般の発明進歩を促かして居るのである

例之は我々相互の通信の如きも此のは手真似をつたなるの言葉か出来文字か出来書面となり飛脚となり電信となり

電信となつた旅行も始めは草を分け険を攀ぢたりのが筏となり橋となり船となり車となり汽車汽船が出来飛行機飛行船が出来た夜のあかしは昔は月の光であつたりのが松火となり蝋燭となり石油燈となり瓦斯燈が出来電気燈が出来た其他衣食住から諸種万般のことは何れも高尚なる創設力の賜である

昔月明りの時分に誰が今は電気燈を夢みたであらうか

鶴を踏み草を分けた時分に誰が今の飛行機を夢みたであらうか

遠く荒野時代に一人の智者がまつて電信の発明に腐心したならば

当時の人は之を目して何と評したであらうか然るに当時不能なり空想なりと看做されたることが今日になつて見れば当時の狂人によつて続々実現せられて居る歟迄の理想は浮土である

理想は天国である況るの理想は無限の学界である

第三十四章　諸物論

諸物は物素の時元に結合せるものである

或る時期が其現出せるのであること社会性を全般に現出せることを得さりしにもせよ其現出せさりし部分はたとへ時を異にしても其社会性は厳存して現出せさりし為めに同形同大なりたることを証拠として止まるなり之を諸物の繁殖性といふのである

我々人間は繁殖する人は人を繁殖し畜人は畜人を繁殖する

動物も繁殖する鳥は鳥を繁殖し魚は魚を繁殖する植物も繁殖

櫻は櫻を繁殖し梅は梅を繁殖する細胞も繁殖する結晶も繁殖する

無生物の原子分子も繁殖するのである

此社会性の繁殖性なるものは遺伝性の直傳に於ける同じ個子の

折り畳まれと同様に同形同大の折り畳まれである故に茲に人間が在れ

は僅かに物をせずして他の所へ全然之と同様なる他の人間が獨り手に突然と発生し茲に又樹かれは是れ亦他の所へ之と同様なる他の樹が突然として発生するのである

普通の考では新に物が出来ると云ふのには之を作る人が離れて居ては眼目て必ず直接に其物に觸れて手なり道具なりを使用して其形ちを作り上げねばならぬ様になるて居る係りなるから我々が手や道具を用ゐるのは畢竟繁殖の効害を取除くの為めにのみ用ゐらるゝに過ぎないのである

其磁場は磁石と鉄との引力である磁石と鉄との間は畢竟互離の在するばかり更に何等の連絡もなく俱今日少しく理屈が出る然るに其引力は一方より他方にのみ及ぼされて後らないのである者又今日の學説物と物との間は總て引力はかりの様に云ひなして存ずる斯く

ては總て之物は皆一つ所に集まらと疑然しと仕無はなければならぬ故に引力はかりではなく現に磁石の同極の如きは互に反撥の方へ離れしかある其他和之の説に対しては横へ曲る方の力斜に進る力迫ゆる力等直別すれば無限に在るのである

又基督教の説にも神の在在を造物せりして斯う三山説を為すのかある曰く精巧なる器物を見るときは我々は熟練せる技術家かありて之を作りしりのなるを知らさるへからず然るに今自然の備物殊に我々の人体を見るときは其精巧なること到底人間業の及はさるりのかある然らは人間以上に高妙なる造物者のありて之を作りしりのなることを信せさるを得ず其造物者は則ち神である此論によれは斯ういふことといなる第一下等のものは上等のものを作ることの出来ぬ之は進化論と矛盾することといなる第二は同等

のものも同等のものを作ることの出来ぬ之は繁殖性を否定することとなる第三は上等のものにしても始めて下等のものを作ることが出来る係し其上等下等の間隔が何の住なければならぬかは最も必要なる点でありながら何とも説明されてないのを不明である

加之此論を仮定すれば我々は斯ういふことを云はねばならぬ曰く器物あり我其人ありて之を作れりと知る人あり我其神ありて之を作れりと知る神あり我其神以上の神あり我其神以上の其又以上のものありて之を作れる神以上のものあり我其神以上の其又以上のものありて之を作れりと知るさしへかうすれば斯のめぐり上に上にと際限がない論者曰く神は最上である他によりて作られず獨り手に在在するものであると然らば我々は又斯ういふことを云はねばならぬ曰く神あり我其他によりて造られず自ら在在するものなることを知る神以下の人間あり我其他更他の為めに作られず自ら在在し得るものなることを知る人間以下の器物あり我其他更に他の為めに作られず自ら在在するものなることを知ふさるへかうすれば

物体の繁殖するのみならず行動もまた繁殖する自分が先へは他人に笑ひ自分が他人を打ては他人も自分を打つ自分が善良の行をすれば他人も善良の行を為し自分が悪いことをすれば他人も悪いことをする故に自分が悪人では他人に何に他人を善人に為さむと思ふ所ふ。既に云ふ。自分が最へは他人も最へすれば他人も饒舌になるまで。故に他人をして善人たらしめむには己れ先づ善人とならねばならぬ他人の善人とならざるのは己れが善人とならざるによりてなる

動物の行動も繁殖する点類の海中を徘徊する魚類の軍

隙の隙全一下行進を為しつゝあるかくてある植物の行動も繁殖する南枝に花の開けは北枝の蕾も綻ふるのである無生物の行動も繁殖する棒の一端を引けは他の一端も引かれ此方に電気を起せは彼方に其同態かあり一関の婦人は金市街の大火ともなるのである

我々の思想も火のかく繁殖する此思想の繁殖は仏傳仏説にて他人の心に繁殖と行くのみならす為外界に対して思想直ちの実現となって繁殖する耶蘇曰く我まことに言葉に告ぐるも信仰ありて疑はすは此山に命じ此より移されて海に入へと云ふとも成らんと丈程に強き信仰てなくてさへ我々の家か庭も繁殖するのである即ち山へ登り度と思へは山へ登ることか出来る耶蘇又曰く古の人に告けて姦淫するなかれと云へることは言葉か聞し所なりされと我は汝に告ぐ凡て婦を見て色情を起すものは心中既に姦淫したり

なりと我々は高一歩を進めて云はねはならぬ曰く古の人に告けて婦を見て色情を起すのは心中既に姦淫したるなりと云へることなる所言か聞し所なりされと我は汝に告ぐ凡て婦を見て色情を起すのは心体に於て姦淫を行ふに至るなりと仏は在れは行ひ外に現はる姦淫せりと思ふのは折かれは姦淫を行ふのとある盗まれ殺されと思ふのは盗み殺しをするのである世に思はすして為すのはなく又思つて為さいるのはない曰く孔子曰く非禮見る勿れ非禮聞く勿れ非禮言ふ勿れ非禮動く勿れと我々は之に一句を加へる非禮思ふ勿れと

第三十五章　三元五等論

三元五等論は三元を軽重なく五等に分ったる世界とする

世界宇宙の有様は結局一定のものとする道理の範囲は更に性情の範囲に於て何時何所に如何なる本元が結合するか結局一定せねばならぬ所で其れは何により如何にして一定するのであるか之に関して三種の学説がある自由論道理論偶然論である

自由論に曰く何時何所に何れの本元が結合するか其れは自由の操縦によって定まるのである操縦するも操縦せぬも自由であることであって道理性情の範囲に於て其結合する所のものを操縦せねばならぬことは定まって居る唯其何れを操縦するかは全然の自由である即ち何等の理由も伴るへき所もないのである

道理論は自由論と正面より否定するのである曰く世の中は古今

将来を向はす、大は勿論如何なる微細のことに至るまでも総て一定不変の道理によつて定まつて居るものである自由なるものは全然ない故に何時何所に如何なるものか有るか無いかは始なきの昔に於て既に之を定まれる確定不動の事實で毫末と雖も之を変更することは出来ぬ唯我々の其れを知ることが出来ると雖とは別問題で若かも我々の思想の如きも無論此道理の支配を受けて居る確定の事實に過ぎないのである

偏然論は道理論を正面から反駁して居る曰く世の中は総て偏然である皆出鱈目出放題である偏然でないものは更にない道理などしかりのはあるまでもない故に今ら一瞬間の後に如何なることか有るか無いか判らない即ち判るべき根拠がない定まつて居ない尤も毎日夜が明け日が暮れる之も偏然である火に水を掛くれば消える之も偏然である之は偏然である偏には消えることもありさうなりそうでないかないこともあるまい此等を道理と云ふならば道理なるものは総て何をしてあるか又左様なる道理は如何にしてあるのかと

偏然論も道理論も或程度までは真理である殊に偏然論は我々の自由論と同一の主旨に帰着すると云ふのは偏然も自由も甚不羈不定は全く同様である唯其語義に自他の区別があるに過ぎない自分から見れば自由である他人から見れば偏然である尚自由を肯定する所の学説は少くない

例へば進化論も自由を肯定するものである曰く生物は一種のアミーバである段々分化して許多の種類を生じ段々進化して人間にまで進つて来たのである之はアミーバが各自自由の方面に分化又は同化を為し各自自由の程度に進化又は退化し得る

ことを云ふのである偶一なる進化論者は尚進理の上に其理由を
説明せんと試むるのである曰く生物は非常に多くの卵種を産む其
卵種が悉く生存するには四囲の情況が之を許さない其許て生存競
爭の淘汰が起り優者は生存して劣者は死亡する而して其優劣の岐
かるる所は一は卵種自体に於て既に優劣あることゝ一は其身体
を使用して発達せしむると使用せずして衰頽せしむると別一は
適候風土の変化に基くこと等である然るに其卵種に於て既に優
劣あることに於ては或劣者の如きは之を偶然の出来事なりと云ふ
て居るが之は等閑視である我々の如きは此卵種中の優劣は必ず
無ければならず若し其運命を左右する所の第一の要件とするのて
ある尚身体の用不用に於ても亦其用不用の岐るゝ所は矢張り
自由ではあるまいか又適候風土の変化に於ては生物は大抵同じ変

候風土の間に雑居するのである故に譬へ鳥も松も竹も結局一
つものになるとも一つの生物が譬へ鳥と松と竹とに分化するさ謂
ればならぬのである加之一般の論者たる生存競爭の淘汰に於ても云
はねばならぬことがある其れは生存競爭有の優劣は卵種兄弟間の
優劣であるから分化大の理由にはならぬかも知れぬが親子間の優劣
とないから進化の理由にはならないのである若も生存競爭を優
勝劣敗と云ふことは単に一時の変態に過ぎないから永い間のことに
すれば全く反対の事實がある様である第一に論者の生存なる文
字の意味は不明である生存の程度は偶然より警察して其間に天と
地との相違がある其程度によっては結果が非常に違はねばならぬ
又若し優者の子生存し劣者は総て死亡するものならば終に優劣
大優者が一人丈け生き残らねばならぬ譯である然るに世の中の實

隙を見れば優者と劣者との競爭は絶体になく所謂競爭なる変態の場合に於ては常に優者と優者との間にのみ行はるものである至るに大所眼を開いて世の常態なるものを見るときは優者は衰えて劣者となり劣者は榮えて優者となり絶えず榮枯盛衰の善悪を繰り返して居るのである

佛教に於て天上天下唯我獨尊と云つて居るのは自由を肯定するものである自分の善人になると悪人になると人を佛とすると鬼とするも世を極楽とすると地獄とするも皆自分次第である即ち自分の自由である

基督教に於て天自ら助くる者を助くるとあるのも同一意味である

儒教は微頭微尾自由の主張である曰く君子は器ならず曰く獨り慎む曰く己に克つ其他到る所此意味の言葉を以て充たされて居る

加之儒教は更に一歩を進めて人能く道を弘むに非ずと断言して居る之は我々の自由は道理性情に基づく所なりと宣ふ道理性情を侵害する所の先導者たることを述べた所の大格言である

自由は道理性情の範囲内のものではあるが其自由の撰擇の仕方によつて更に自由の範囲を廣くすることも狹くすることも出来ると云ふのは性情の上に反射が多く道理の上に衛生が多くなる様なれば自由の範囲の狹くなるのである之基督の妨害が少くなる様なれば自由の範囲が廣くなるのである自由の狹いのは悪である自由の廣いのは善である此善は總て自由撰擇の仕方によらせる所の善である總て自他の行為に対して信賞必罰をかかるものは我々の自由である此自由を措いて外にはないのである善を為すの我

之が之を賞せざれば外に之を賞するものはないのである悪を為すものを罰せざれば外に之を罰するものはないのである

未天祐天罰なしと唱えて自然の制裁なるものを認めず思はれて

既れば全然我々の自由の集合に外ならぬのである然るに此自由

善悪に関し甚だ三種の学説かある性悪論性善論折衷論である

性悪論に曰く我々は善いことは為さずして悪いことを為すものであると荀子曰く人の性は固と小人なりと孟軻の性悪論者へ人間は偶て罪悪の者であるから之を懲悔せねばならぬと云て居る唯此等の性悪論は移して以て善を為すことを得と云ふのである畢竟り老子に云へる如く我々は絶体に善い事は出来ぬと云て居る曰く三十輻一轂を共にす其無きに當つて車の用あり又曰く大道廃れて仁義あり智恵出て大偽あり曰く為さず為し為さざるなしと

故に何にもせぬのか一番悪く成ると云ふ如きである此等に或々の為す所を見るに倉獄を取り殺して日常の食用と為すが如き此性悪の論倒である此等の倉獄は果して何の罪悪を犯して人の網にかゝり其無辜なる生命を犠牲とせねばならぬか或に曰く此等は不束人の食用の為のみに在るとか曰く人間の為にこの我々の引水の議論で倉獄の伸用には適用せざる暴論である

此性悪論に仕人の云へる通りして看察するのか厚世三郎又悲観説で曰く世の中には悪人のみか多く云かも大悪人列と禁えて善人は寡へる善に善報なく悪に悪報なし司馬遷の歎したる天道は果して非なりてあると信じ此所は一の考を様てある果して斯くのごとくならば地獄なりも乱暴な所てある悪人果して繁元善人果して衰ふ

るものならは論者は皆悪人になつた方か宜しからうと思はれる其れ若し悪人になり度くないと云ふならは其れこそ論者か勝手に禍を招くもので仁を求めて仁を得たり亦た何をか怨みんで我より同情すへき必要もなけれは何とも致し方のないのである

性善論に曰く我々は本来善いことをするもので悪いことをせぬものであると孟子曰く人性もと善なりと孟子と告子とも論争した告子曰く人性は杞柳の如く仁義は桮棬の如しと孟子曰く杞柳の性に順つて桮棬を為るか杞柳を戕賊して桮棬を為るかと

性善論を先方一週しは楽天主義である曰く世の中は何一つとして我意のめくならさるものはないと甚しきは世の中は最早意求も加ふる所なき完全無欠の極楽であると云か論者の主義は如何なる境遇にも之に満足して其上の欲を起さないと云ふのである係しな

から極端になれは人に打たれても痛くなく飢餓に迫つても何ともなく人か死でも悲しくないと云ふ様なことになる

性善性悪の折衷論には種々の説かある一説に曰く人性善悪なし一説に曰く各人皆善悪両性を兼ね有して居る一説に曰く善人もあり悪人もあり一説に曰く性相近きなり習相遠きなりと之は孔子の説である人の本性は大同小異であると云ふのである

此折衷説も向ふ一週して云ふと世の中は楽しみもなく又苦はかりもなく苦楽混淆のものである其れ故にこそ種々には種々為すへきの仕事か絶えないのである

尚自由廣狭の程度即ち善悪の大小においても古来種々の学説かある

其事物に関する学説は大別八種である個人主義戦争主義厭世主義

義第三者主義及数主義譏沢権制限主義和解最大多数の最大幸福説
全数設等これなり
個人主義又利己主義に曰く自己の自由が虐げれば害は大てある
他人の利害は顧る所てなしと此説に依れば自分の為めならば詐偽
盗賊殺傷何ても宜しいと云ふことになる式を以て見れば悪中大
悪てあるか恐かな世間には此の出して云はないても表心に此説
を服膺するものは大多数てある若かも些説としても艶曲に詭激さ
れて居る曰く犯罪は刑罰を受けて自己の自由が狭くなる故害てな
い又刑罰を免れる様犯罪を行みにすれば同一く自己に其大の苦
痛を蒙むれはならぬ之世の中は総て皆自分々々に自己の自由を
主張するのたから自分から他人の世話をするには及はないのて
あると

獨尊主義は利己主義の結果として各自自己の自由と主張し其自
他互に相面立せさる場合に於ては腕力に訴へて之を解決するの
ある時には官軍負けれは賊となる勝つた方か其自由を廣くするの
を言ひとせはなるとのことのある係り何れも負けるのうちなら何
なりのてあるか
唱する者尊王主義又利他主義愛他主義は利己主義の正反対てある
曰く戰爭とは互に奪ひあるから寧ろ互に人に譲って他人の自由
を廣くし自己の自由は之を狭くするか善の大なるものてあると
之は縛しの人か世間に譲歩すれは賊に結構てあるか自分は少し宜
歩して他人のためは之に乗じて其自由を過大に主張されては却つて
気の毒なりと迷惑てあるはなるまい
仲裁主義又第三者主義に曰く當事者は自分等の自分の善悪の大

ふと決することは出来ないものであるから全然局外の第三者による
つて公平の裁決を為すべきものであると信ずるから何等の関係な
き第三者が之を判断するにはどの程度の根拠とも有するものでなく
ては全く賭博の勝敗と一般である
多数主義乃多数決論に曰く總ての人は何等かの一定の関係を有
せざるものはなく故に總ての人の多数によつて是非を決せざるへ
からざるものとす保し此説によれば少数は多数の犠牲となる
のみならず各人関係の多少と商量せざるの故庶さ自由は却つて狭
き自由の為めに陳蹂せらるゝ場合かあるのである
諸説統制限主義は各人関係の多少を商量して其優決権に差等を
設くるの説なるか者要方法と雖も一方は他に
他方の犠牲となさるを得ない場合かある

和睦主義は少数と雖も之を犠牲と為さず一方に於て自由を伸張
し他方に於て之を調和する代りに一方より他方に対して之か相當
なる補償を無ふものである之は有無相通する訳の交換方法に過ぎ
ないのである善は善でも至大の善と云ふことは出来ぬ
最大多数の最大幸福説はベンタムの首唱である此最大なる文
字は明瞭なるか如くして此場合甚だ曖昧である全数に近いのであ
らうか全数ではない然らば百人なら百人の内幾人からか最大と云ふ
のであるか判らないのである
全数論は孟子の王道及び荀子の辯直論である荀子曰く君
子なる者は善く辯するものなり辯直當れは則ち萬物皆其宜を
得て言皆其長を得辯生百其余を得と又曰く辯を合するものなりと
孟子曰を用ひは必ず王道を唱ふ曰く今王百姓と楽を同うせは則ち

主たらんと曰く民の樂を樂み民の憂を憂へ樂みて天下を以てし憂へて天下を以てす然り而して主たらざるものは未だ之れ有らざるなりと曰く左右皆曰く賢なりと未だ可ならざるなり諸大夫皆曰く賢なりと未だ可ならざるなり國人皆曰く賢なりと然る後之を察し賢なるを見て然る後之を用ひよと曰く左右は言を聞て則ち極す大臣は言を聞て則ち極す大夫と為すべき大なるはなしと

其空間に関する學說は曰く一身一家の自由を擴にして全天下の自由を顧みざる者は私慾なり偏頗なり云へふのみ一身一家の上から云へば驕奢全天下の上から云へば吝嗇である故に驕奢と吝嗇とは一つものである之に反して全天下の自由を廣くするのは公正無私と一身一家の上から云へば禮讓である

故に節儉と禮讓とは一つものである

其時間に関する學說は曰く一時一生涯の自由を望むべき未來萬世の自由を顧慮せざるものは經慮怯懦怠惰因循姑息なり云ふのである之に反して未來永久に至るまでの自由を廣くするのは深謀遠慮熱心冷靜不耐勤勉大勇なりと云ふのである我々今日の如く自由の大なるものあるは皆古來の勤勉の賜である故に今其發達の順序を略述すれば概ね十段の時紀に分つことが出來る

第一昔の昔の大昔は判らぬ すべてある

第二に近く混沌時代からの一切の狀態は極めて學統で動植物は勿論今日の無生物でさへ未だ無かつたのである即ち空氣もなく水もなく石もなく金もなく些從にられば化學上の諸元素は無數の音より打ち續き存在せるものと云はれて居る信しなから我々は唯其

實質たる体元があつても未だ此等の元素にまんは形成せられて居なかつたものと思ふ

第三は無生物時代である此時代になつて始めて化学上にいふ元素化合物混合物類の無生物が出来たのである其れも元と一定の体元が混化時代に於て此等の無生物たらざることを理想として慨力一致協力永い間の勤勉を為したる結果(吉)し得られたのであるといふのは此等の無生物として其自由として短時間のほに現ぬ得ぬさのであると無いからである

第四は植物時代である我々の無生物であつた時分如何にもして植物にまで立身したいといふのんで出来たのである此等の植物には自由の思ふ得ぬさものがある陸続にまんは無生物より生物の生ずることは絶体にない生物の体源は之を無生物に外におめなければならぬ如何としてまんは単に無生物のみをもつてしては此等とい石に混和せしめるも決して生物の出来上る様のことはないのである故に生物となるには何ぞうしても更に生命を有する一種玄妙なる者の来つて其重稚を伸して見れなければならぬものであると云つて居る又其れと正反対の陸続にまんは生命は無生物の混和によつて直接に之を作り上くることの出来るものと云はれて居る信し此等は何れも混和活能主義とでも云ふへき議論にして世の中は勤勉の為め勤なのみさる時間を要するに此まんは何事をも出来るものでないと云ふことを居和して居るのである

第五は動物時代である植物たりし我々は動物たらむことを理想として勤勉せる結果終に動物時代を現出したのである此動物に於て我々は廣き範囲の自由を認め得るのである陸続にまんは動物と

植物とは元来其系統を異にする右の原始生物としては共に同一であるが其れより動物は動物の方面に植物は植物の方面に互に別々の方面に岐れて進化したものであると云つて居る保証なから我々は論者の所謂原始生物をはつて之を植物なりと看做すのである何となれば動物の存在の為めには食用の為め前はつて植物の存在を必要とするからである

第六は人間時代である人間には高尚なる自由のあることは別に云ふまでもなく其動物より進化したりのであることも異論のない所で一説には今日の猿の類の一種であるとも云はれて居る或る学者が猿であつた時代人間に進歩せしめる為め非常に勤勉であつたのである

第七は文明時代である之は今日の我々の時代である我々が始めて人間になつた野蛮時代は禽獣を距ること遠くはなかつた其れと勤勉とに比べて此所まで進歩をけたのと今日では人間と他の動物とは丸で比較にならぬ程の大懸隔が生じて来たのである

第八は浄土時代である我々今日の理想は釋迦の浄土又耶蘇の天國である其実現は何時の頃に在るべきかは一に我々の勤勉如何によつて定まるのである

第九は浄土に上の時代である釈迦の浄土も耶蘇の天國も決して自由進歩の絶頂ではない我々が将来浄土を得天国に達した暁には所謂人怨憎長なるものか更に仏神怨憎長となつて其又上の理想を起すのである仏一浄土に上天国に上の理想其れは如何なるものであるかは其時にならねば之を想像することは出来ぬ唯喩を以て之を比較して云ふときは此時代より浄土時代と見るのか人間時代

より動物時代や植物時代を見ると一般にあらうかと思はれる。

第十は永久時代である之れは又矛盾の到らないものになるのである何となれば我々の理想の漸次実現せらるると共に我々の理想は更に其に上に上にと進歩と進歩の上に進歩をかゝへ其上にも進歩一層何新まる時限がなくなるのである故に将来のこと迄になれば後になると其懸隔が甚しく今日の人間と原始植物のアミーバは恰か物質の分子原子の如く取扱ふ時代も来れば更に進むと尚其れ以上の時代も来るのである而して其れが甚だしくなれば譬喩比較をすら想像することが出来なくなるのである。

Lc4
'10E

終